麗澤教育　第四号　＜目　次＞

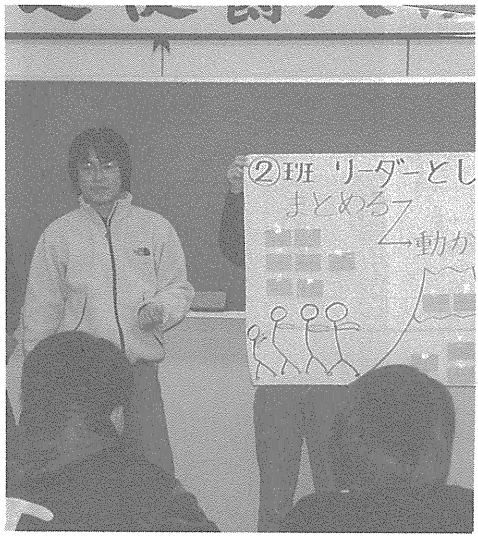
写真・麗澤大学近況 …… 2
回想記 …… 竹腰　捨一 …… 6
＜特集「私の出会った人・出来事」＞
私の出会ったことば …… 坂本比奈子 …… 11
経済学と私 …… 永井　四郎 …… 17
私の人生を変えた人・出来事 …… 大貫　啓行 …… 22
私の人生を変えた人 …… 中山　理 …… 27
一九九五年身辺雑感 …… 瀬川真由美 …… 34
＜論説＞
慈悲の内容をめぐって …… 欠端　實 …… 40
異文化とカウンセリング …… 水野修次郎 …… 45
＜ゼミ報告＞
「咸臨丸」を学祭に展示して …… 国際経済学部丸山ゼミ …… 50
＜課外活動レポート＞
少林寺拳法部雑感 …… 山田　研一 …… 65
底辺からの出発 …… 山本　昌寛 …… 70
バレーボールと私 …… 柏　亜希子 …… 75
E．S．S．の活動と目的・課題 …… 土佐　和也 …… 79

麗澤大学近況

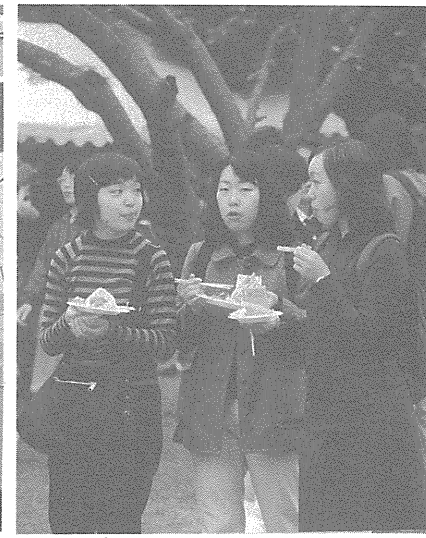
平成９年度　入学式

谷川セミナーハウスでフレッシュマン・キャンプ（国際経済学部）

外国人留学生歓迎懇親会。台湾の民俗舞踊を披露。

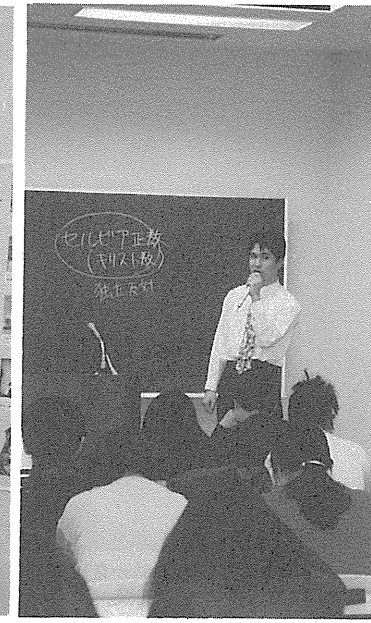


谷川セミナーハウスでリーダーセミナー。
KJ 法によるグループ発表。

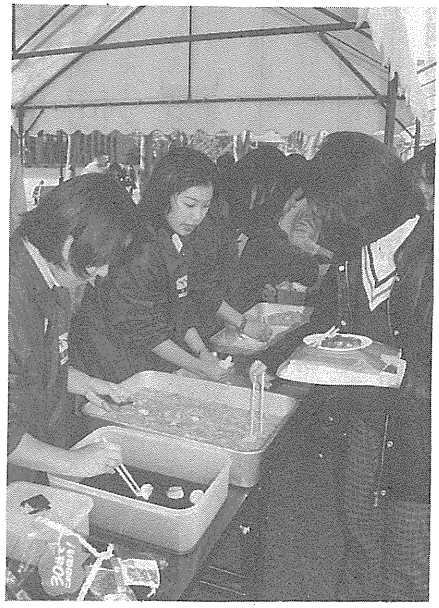


野外昼食会

留学生が白井町立清水口小学校で国際交流。
小学生に餃子の作り方を指導。



サラエボボランティア報告会



国際交流　もちつき大会

茶道部がお手前を披露。貴賓館にて。

大学祭実行委員会のメンバーが
事前の打合わせ。

大学祭でRIFA（麗澤国際交流親睦会）
のメンバーと留学生が協力して各国の
文化を紹介。

回想記

前国際経済学部教授　竹腰捨一

半世紀以前の四八年六月（昭和二十三年）民間貿易再開以降今日まで実務社会・大学において貿易に直接・間接に関わりあってきた。五十年代・六十年代の大半海外勤務を経験したが、その中で五十年代後半は日本企業の輸出品目が多様化し、さらに企業の海外事業拠点は強化され、自ら現地の国内市場に踏み込む等新たな展開を始めた時代であった。この時代は私の人生経験にも大きな影響を与えた。ここで当時の実話を織りまじえながら回想させていただくことにする。

今日、大多数の日本製品は、品質、価格、さらにサービス、そのいずれの面においても欧米工業諸国の製品を凌駕している。この事実によって世界中の消費者から「MADE IN JAPAN」は最高の製品の代名詞と言われるほどの評価を受けており、日本人もこの評価を誇りとしている。

ところが、かれこれ半世紀前の五十年代までは、今日とは逆に国内の識者から日本の輸出品は俗に言う「安かろう悪かろう」式の粗悪品であると誹謗されていたし、今日でもその誹謗が全く故なしとしないものであることを指摘する者が少なくない。

確かに「安かろう悪かろう」と言われても仕方のない粗悪品が輸出されていた事実もあったが、少なくとも繊維製品等の主軸輸出製品は現地の同種製品と比べ

て割安であったので、ダンピングのそしりこそ受けていたものの、決して粗悪品の類いに属するような製品ではなかったことも事実であった。

それではどうしてそのような誤解ないし、錯誤が生じたのであろうか。私の記憶を通して当時の実情を述べながら、その真相を少しでも明らかにしてみたい。それには、まず日本では信じられないような米国での実話を披露することからはじめる。

五十年代の後半、ある大手商社が米国向けドッグ・フッドを輸出しはじめたところ、その販売量が当初の予定を数倍も上回り日本国内での生産が追いつかなくなった。そこで生産設備を拡充する必要に迫られ、どの程度の需要が見込まれるかについて改めて市場調査を実施したところ驚くべき調査結果が得られた。その結果によると、ドッグ・フッドは本来愛犬に与える食べ物であるが、その目的で愛犬の主人公達が買うよりも、シチュー風の煮込み料理の食材として主人公達自身の食事に供せられる需要が数倍に達していたと言う事実であった。この信じられないような事実をその商社の現地担当者から直接聞かされた。当時の日本人の日常生活は今日ほどに豊かではなかったが、それでもドッグ・フッドを食べるなどと言うことは想像もつかなかったことであった。

この実話は余りにも日本人の生活常識とかけ離れ過ぎて実感がわかないかも知れないので、もっと身近かな実話を紹介してみよう。

米国のバーゲン・ストアあるいは大衆百貨店の地階にある常設の特売場をのぞくと、日本人の感覚からすると一体誰がこのような商品を買うのだろうかと、頭をかしげたくなるような粗悪品が積まれているのが、目にとまる。しかも、そこはどの売場より常にお客が群がり賑わっている。五十年代には数多くの日本製品をこのような売場でみかけたものである。戦後における日米貿易摩擦の第一号となった「ワンダラー・ブラウス」もそのなかの商品であった。

この対米向け「ワンダラー・ブラウス」の輸出経緯は駐留米軍を経験した米国の零細輸入業者が日本のアパレル製品の優れた品質と価格の安さに着目し、自社

のマーカー（型紙）と仕様書によって大衆市場で目玉商品として販売するために日本から輸入したのが始まりであった。ところが、日本製ブラウスは米国製の大衆製品と較べて、あたかもダイヤモンドの輝きのようにその品質は抜群に優れていたため超割安品であるとの評判が高まり、日本製ブラウス・ブームがおきた。このブームに乗り遅れまいとする米国専門業者が相次ぎ、輸入量は急増し続けた。しかしながら、日本製の急激な進出のあおりを受けて経営危機に陥った米国の縫製業者は日本製ブラウスをダンピング輸出ときめつけ、米国貿易委員会に提訴の構えを示すなどの強硬な輸入阻止運動を繰りひろげた。五六年（昭和三十一年）米国政府はこの事態を憂慮し、一方的に輸入規制措置をとるに至った。

他方、日本の商社・縫製業者はこのブームのお陰で大いに潤ったが、一部の業者は米国でのブームに便乗して国内でもブームを引きおこそうと図り、対米向けブラウスと同一規格の製品を国内で販売したところ米国式仕様は従来の内需用規格と比べて製品が粗雑であったので期待に反して国内の消費者の関心を得られずに終わり大損をする結果となった。

以上の実話からして、日本人は案外贅澤な国民であることを日本人自身が全然気付いていないことを理解できよう。またこの実話からして「安かろう悪かろう」とのかつての日本製品に対する誹謗は海外市場の実態を理解しないで、日本人自身の品質基準の尺度で製品評価をくだしていたことから生じた誤解ないし錯誤であったことも認識できよう。

ところで、ドッグ・フッドは別としても、ワンダラー・ブラウスの場合バーゲン・ストアーないし特売場で売られていたこと自体「ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ」は安物商品であるとのイメージを与えていたことは否めない。しかし、これは「安かろう悪かろう」の問題でなく、日本の輸出業者の米国市場に対するマーケティング能力の足りなさから製品を適正に販売する手段を知らなかったことから生じた問題と言えよう。このことはワンダラー・ブラウスに限った問題ではなかった。だが当時は「安くて良い品」をより

多く輸出するのがモットーとされた時代であった。

五十年代の後半頃から輸出品目が多様化し、一昔前の家電製品を中心とした花形輸出製品のはしりが市場に登場し始めた。その頃ソニーはすでに独自の販売組織の整備と自社ブランドの知名度を高めるために広汎な宣伝・広告を活発に展開しつつあった。その成果として当時の主力製品であったトランジスター・ラジオは堂々と一流ストアーの店先で米国製品と肩を並べて販売されていた。他方、日本国内ではソニーよりむしろ有名ブランドの製品がバーゲン・ストアーあるいは特売場で大きなバスケットのなかに山積みされて売られていた。このように日本国内では同格品として売られていた製品が米国市場では全く異質の製品として取り扱われているのを眼の当りにみて私自身大きなショックを受けた。

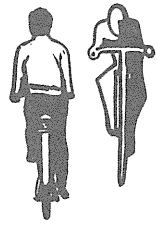
当時でも新商品を市場で売り出す場合には需要予測を中心にデータを収集・分析するなどの調査を行うのが通例になってはいたが、このラジオの実態は異文化社会環境に対応するマーケティングの発想能力の差異から生じた結果と言えよう。つまり、いかに製品の品質が優れていても必ずしも現地の消費者から適正な評価が得られるとは限らない。現地の消費者から適正な評価を得るには現地に適したマーケティング活動を行うことによってはじめて得られるものであると感じとった。

しかし、トランジスター・ラジオは市場に登場したばかりの新製品であるので発想の転換により成功を生んだが、私が取り扱っている繊維製品は永い伝統と慣習にはぐくまれているので創造的なマーケティングがはたして可能なのかと自問した。随分悩んだ末「先入観の先走り」にとりつかれていることに気づいた。

人間誰しも自分が生まれ育った文化社会環境のなかに根ざした独特の考え方、感じ方、価値観を身につけているので、常に先入観がつきまとっていることを認識することが必要である。いわゆるインフォーメーション・ギャップ（情報理解の隔たり）を認識することである。しかし、先入観は軌道修正しないとバイヤス（隔たり）は消えない。ところが技術水準などのよう

に評価基準の尺度のあるものは実証的調査、データにより現実を把握できるので、おのずと軌道を修正せざるを得なくなる。逆に、文化社会環境は基準尺度がないため、修正するのは容易でなく、時間がかかるので先入観が優先し、そのため錯綜し、方向違いの結末に陥る危険性が多くなる。

このような結末に陥らないためには、ひらたく言えば「郷に入れば郷に従え」と言えようが、実際にはそれ程に簡単なものでない。結論として、ビジネスに限らず異文化社会環境を理解するには、感受性と順応性を培養する自覚をもつことが原点であると悟った。



私の出会ったことば

外国語学部教授　坂本　比奈子

私たちは、日常望むと望まないとにかかわらず、他者から受けることばに励まされ、慰められ、時には傷つけられることもあります。そのことばは思いがけず深いところで私たちを支配したり、また自分とは何者であるかを教えてくれるのではないかと思われます。

昭和の激動期を生きてきた私たち中高年層の日本人はみな、なんらかの大事件を経験しています。私自身も、小学生のときに旧満州からの引き上げという大きな出来事を初め、実にいろいろな体験をしておりますが、その中で、多くの方から受けたことばの数々によって支えられてきたとの思いがあります。しかしたった一言が人生を変えたといえるものはないようです。そこで、私の人生を変えたというよりは、心の中にどっかりと根を下ろしていることばにまつわる話を述べさせて頂きます。

私が高校生のころでしたが、照れ屋の母がいつになく新婚のころの話を始めたことがありました。父が結婚したときに何も財産がないことに触れて「俺が親からもらったものは誠実ということばだけだ」と胸を張っていわれて、ショックをうけたという話でした。母がいうには母方の家では財産は多少あった代わりにそのような教育は受けてこなかったので価値観の相違を感じたが、父方の家にたいして尊敬の念を抱いたとい

うことです。そしてそれを子育ての信条としてきたということでした。私はその話を初めて聞いたわけですが、そのときすでに「誠実」の二文字が否も応もなく我が心の中に収まっていることを感じました。父は、飲兵衛のサラリーマンで、こどもたちに心の中では馬鹿にされている日本のお父さんの一人だったのですが、このとき初めて自分のルーツに誇りのようなものを感じたことを覚えています。誠実、真面目、正直などは二十数年前までは、日本の庶民が共有する価値観であったと思います。新聞の世論調査で日本の親が子に教える徳目の一位が正直であったのはそう遠い昔ではありませんでした。ところが、今や誠実ということばほど胡散臭いことばはないというより、いやもうほとんど死語といってもよく、口に出すのも恥ずかしいことばになってしまいました。

しかし、私はこの「誠実」ということばに関していくつかの体験をしております。一番目はタイの東北地方でのことです。高床の家がぽつんぽつんと点在し、電気もなくバスも来ない村でした。店は一軒だけあり、のぞくとガムとキャンデーが少々ありました。そこで夜、村人が集まってきて話をしたときに、敗戦の時に日本軍がカンボジア国境に集結していたが、兵士が切腹したのを見たという人がいました。そして「日本人は誠がある」といいました。そのとき私はとてもびっくりしたのです。なぜならタイ人の価値観から、国のために死ぬということはちょっと考えられないからです。自分たちは決してとらないような行動でも、それを評価するということがあるというのはとても不思議なことに思われました。

次も同じタイですが、私が、タイのチュラーロンコーン大学の日本語学科から指名を受けて日本語講師として赴任したときです。どうして私が指名されたかというと、「坂本先生は真面目だから来てくれると思った」ということでした。日本語学科の先生はほとんどが日本留学経験者で日本人のことをよく知っています。もちろんタイと日本を比較してタイの方がいいことはたくさんあるわけですが、タイ人は一般に日本人の「誠実さ」を尊敬していたようです。それが新人類

が日本語教師として派遣され始めた頃、最近の若者はどうしたんだろう？という嘆きの声がタイ側から起こりました。最近ではもうなれっこになってそういう声はないようです。

二年前の正月に私は中国から一通の年賀の手紙を受け取りました。それは中国貴州省の水族の娘さんからのものでした。私はその前年の三月に初めて貴州省に入り、タイ系民族の一つである水族の言語調査を致しました。貴州は中国で最も貧しい省といわれています。現地調査というのは、二種類あって、一つは大勢を対象に行うアンケート調査的なものと、もう一つは一人の人に情報提供者（インフォーマント）になってもらってその人の言語を調べるものです。私のねらいは後者でしたから、いい情報提供者に出会うかどうかが、調査の成功の鍵となります。いい情報提供者に出会わなければ、はるばる貴州まで行った苦労が無になるわけです。しかも初めての土地ですから、情報提供者は現地に行ってから探さなければならず、とても不安でした。けれど幸運なことに、初日のうちにとても素晴らしい人に出会うことができました。二十才の女性でパン・ユエランという人でしたが、漢語（いわゆる中国語）が達者で、社交性があり、根気がよくて毎日へとへとになるまでつきあってくれました。けれども油断はできません。彼らはひごろ農作業などをしていて、ほとんど本を読んだりしない生活をしているので、用意した調査表に従って一語ずつ聞きながら、発音を確認していくという作業には飽きてしまう可能性が大きいのです。長年のタイ語調査でそうしたことはよく分かっていたので、飽きてきたら話題を変えたり、休憩をとったりします。また、私にとっては、水族は大切な友達ですが、通訳やガイドの漢族（いわゆる中国人）にとっては、少数民族は文化のレベルが低い民族だとして蔑視をもっているのが普通です。それが何日も一緒に暮らしながら調査をするのですから、摩擦が起こらないように気を使わなくてはなりません。あるときパン・ユエランが一口食べて箸を置きました。病気かと思って聞くと「まずい」という返事。彼女には漢族のご馳走が口に合わなかったようです。

まずいといわれて、通訳の漢族は露骨にいやな顔をしました。でも、私にはパン・ユエランのこどものような天真爛漫な態度がほほえましく思われました。

私は中国語が話せませんので、調査は通訳を介して行ったので最初は直接話をすることができなかったのですが、調査が進むにつれて水語でかたことの会話ができるようになってきました。お昼休みは二人で腕を組んで散歩に出ます。道を歩きながら彼女が水語で「あれはなに？」と聞いてきます。私が答えるとけらけら笑って「違う！」とか「当たり！」と答えます。ときどき「疲れた？」と聞きます。こんな風にしてなんとか三週間の予定を終えて帰国しました。パン・ユエランはバスが出る直前まで「もう質問は無いの？」と聞いてくれました。私は感謝の気持ちを込めてクリスマスにカードと写真を送ったのです。中国語でお礼のことばを書いてみました。水語には文字がないので漢語です。その返事が一ヶ月以上経って来たのです。急いで開けると、「あなたは私の母親のように私にいろいろなものをくれたり、私に気を使ってくれた。あなたの笑顔が目に浮かぶ。あなたの誠実な人柄を忘れない」という意味のことがしっかりした文字で書かれてありました。私は「誠実」という文字を目にして信じられない気持ちでした。あの貴州の山奥の水族の娘が、「誠実」ということばを使うのか。私は思わずうなってしまいました。そして、心のどこかで水族の人々を別世界の人という目で見ていた自分に気がつきました。あのこどものように無邪気に思えた人が、このように私のことを分析して見ていたのかと驚くばかりでした。蔑視の感情はないつもりでも、彼らの心の中を見ようとしなかった自分を恥ずかしく思いました。昨年春に、大学院生を連れて再訪したときには、連絡不十分でなにも準備していなかったにもかかわらず、三十分後には、三人のインフォーマントと部屋を確保してくれました。調査が始まると同行したタイ人の学生に興味をもち、タイ語ではなんというの？と逆調査を始める次第で大笑いでした。四時間ほどの慌ただしい再会でしたが、「どうして泊まらないのか」と引き留め、最後はバスに乗り込んできて私の腕をつかみ「降

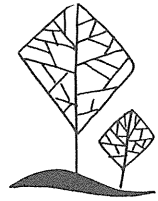
りて」と命令するので危うく置いていかれるところでした。

水族は、長い間漢族とは交わらず暮らして来て、仏教も儒教も入ってないと思っていたのですが、彼らのいう「誠実」とはどこから来たのでしょうか。どんな内容をもつことばなのでしょうか。試みにある韓国人留学生に韓国ではどうかときいてみました。すると彼の家でも「誠実」ということは大切なこととして教えられたという返事でした。

一方、今の日本社会の現状は、大人がことばをストレートに若者にぶつけても、なかなか通じません。昨年暮れ、卒業生の一人が訪ねてきて話をしていたとき、「先生は前進ということばが好きですね」といいました。「何かあっても自分が前に進んだと思えればいいじゃない」という言い方をよくする、というのです。意識のずれを指摘されたみたいでどきりとしました。その子はある作家の「一つのものにこだわるな。いろんなことをやるべきだ」ということばに感銘をうけたのだそうです。日本のように流動的で成熟した社会では、若者の方が新しい状況にすばやく対応できるから、既成の価値や知識の伝達は意味がなくなっている。学校という教育装置はその前提が崩れているとまでいうのが戦後世代の主張のようです。その結果大江健三郎さんがノーベル賞の受賞記念講演で「品位ある日本人はどこへ行ったのか」といわなければならない事態になったわけですが。

ところで、「誠実」ということばは、儒教圏の専売特許ではありません。例えば、ニーチェは、人間の自己自身に対する「誠実」の能力とか、誠実という自発的な苦悩、ということをいいます。それは、人間や世界の赤裸々な「真理」を深く認識し、それがどれほど矛盾に満ちたものであろうと、あくまでこの「真理」に従うことで「生の本来的な意味」をつかみとることだというのです。タイ人や水族のいう「誠実」も少しずつ意味するところは違うと思われますが、こうなるとかなり中身が異なってきます。それともこれらのことばにはなにか共通する価値が含まれているのでしょうか。

大江さんの講演は外国でたいへん評判になり、講演の録画テープを頂いたので、私は教室で見せてみました。すると学生たちはあの大江さんの訥々とした英語の講演をしーんとして聞いたのです。授業の後で一人の学生が来て、「たいへん感激した。将来について考えが変わった」といいました。七十人中のたった一人にどれほどの意味があるかわかりませんが、私が励まされたのは大江さんのことばを胡散臭いとうけとらなかった若者がいたということです。それはなぜか。そして大江さんにならって伝達すべきはどのような価値なのか。「誠実」はそれに値するのか。どのようなことばでそれを伝えれば若者の心に届くのか。それを誠実に考えるのが大人の義務ではないかと思います。



経済学と私

国際経済学部教授　永井四郎

私と経済学との出会いは、単なる成り行きの結果にすぎなかった。経済学に対して何か特別な想いがあったわけではなかった。したがって経済学が、心理学であっても数学であっても私にとって一向にかまわなかったのである。こうして私は何の目的意識もなく経済学の門をくぐった。

昭和四〇年代の日本の経済学界は、依然としてマルクス経済学と近代経済学の二極分化が顕在していた。私は双方の原論講座を受講した後、迷うことなく近代経済学を選んだ。それはマルクス経済原論の授業で「革命」という言葉が使われたことに反発を覚えたからである。といってもそこに何かある理論的根拠があったわけではなく、私の想いがただそのように傾いたにすぎないのだが…。したがって、近代経済学の選択もまた私にとって無目的的であった。

近代経済学は、数学に対して特に苦手意識をもっていない私にとってもかなり難解な学問であった。けれども、ある仮定の下でモデルを構築し、演繹を通して何らかの結論に到達するという作業は、強く私の心を捉えた。当時消費関数に興味をもっていた私は、デモンストレーション効果に関する数式モデルをいじくりまわして楽しんでいた。そしてある種の結論が導かれると、胸が高鳴り、ゼミでの報告が待ち切れなかった。卒業年次になって、是非この楽しみを続けたいと思う

ようになった。したがって大学院への進学は必然的であった。

大学時代ひたすらモデル・ビルディングを楽しんでいた私は、その分野の周辺知識は人一倍身に付けていたが、逆にそれ以外の知識は浅薄であった。またドイツ語も単位を取る程度で、その経済書を読む訓練を怠っていた。当時名古屋大学の大学院は筆記試験に合格した者だけが面接を受けられるというシステムであったが、私は面接を受けることなく不合格となった。そこでやむなく関東学院大学の大学院を受験した。面接教員の中に故高島善哉教授がおられ、私の研究計画を尋ねた後、「経済学は数学で分析できるものではありませんよ」と諭すようにいわれたことを覚えている。私は困惑した。場違いな所を受験したような想いであったが、合格通知を受けたので入ってしまった。入学してみると案の定、全院生の内、私と坂井吉良氏（現釧路公立大教授）だけが近代経済学の専攻であった。ただし笠井信幸氏（現八千代国際大教授）や澤喜司郎氏（現山口大教授）は中間的な位置におり、また私と同期であったため討論とまではいかなくとも研究上の話を交えることができた。多くの院生はマルクス経済学の専攻であり、特に私と坂井氏は、完全に大学院の中で孤立した存在となっていった。

大学院の近経演習講座は「数理経済学」のみであり、勿論坂井氏と私はそのゼミに所属した。私達は、G・デブリューのThe Theory of Valueを研究した。当時工学部に位相解析学の西尾和弘教授がおられたことは、私達にとって幸運であった。西尾先生は、半年間に渡って一般均衡理論の理解に必要な数学を無償で私達二人のためにご教授下されたのである。今思えば、ブラウアーや角谷の不動点定理を先生無しでどこまで理解できたか疑問である。

大学院の中で経済学について互いに議論し合う仲間が少ないことは寂しい限りであった。いつしか私達は、院生としての籍はそのままにして、外部に目を向けるようになっていた。坂井氏は青山学院大学の山根研究室に通い、計量分析の方向に向かった。一方私は、上智大学の兼光研究室の門を叩いた。当時私の関

心は、情報がｎ＋１番目の財として一般均衡理論の体系に組み込まれうるのかという一点にあった。兼光先生は情報効率分析の専門家であり、先生との出会いは、私の研究に大きな影響を与えた。一般均衡理論の体系に知識の生産の入り込む余地はないこと、さらに知識の生産は物財生産関数のシフトではなく変容として実現するといった私の見解に、さまざまな視点からコメント下されたのである。さらに先生は、当時宇沢弘文教授を中心とした理論経済学の研究グループ（東京経済研究センター）に私を加えて下さった。私はその研究会で、二度報告の機会を与えられた。第一回目の報告では、三十分も経過しない内にモデルの大部分が完全に崩壊してしまった。それはたった一つの誤りによってであった。一つの錯誤がモデル全体を崩壊させることがあるのである。その時ばかりは、ほとんど生きているという感触を失った。これはまさに恐怖の一種だと感じた。次の日は何もできずに床についたままであった。一年後に二回目の報告をして、いくばくかの汚名を回復したように思っている。東京経済研究センターは、日本の代表的理論経済学者の集団である。そこでの多くの研究者諸兄の報告に耳を傾け、討論への参加を通して、私は理論モデル構築の方法を徐々に肌で覚えていったように思う。

理論モデルの設定を通して有意な結論を導き出し、それが経済理論上どのような意義を有するかを考えることは、たしかに知的興奮をよぶ。人は、それを学問をすることの悦びであるというかもしれない。私がそのことに疑問をもちはじめたのは、三十歳代半ばになってからであった。それは学問の個人的意味という問題として生じたのである。私にとって経済学とは何か、私はどこに向かって歩いているのかという問いかけであった。当時論文を手がけることはもとより、学術書を読むことすらできない状態にまで陥ってしまった。そうした折、「科学における客観的真理は、研究者の主体的営為を通してのみ確立されうるという点で、科学的認識は個人的認識でなければならない」とするマイケル・ポラニーの科学観が、私に強い衝撃を与えた。しかしそれは、私の迷いを解決するほどの力をも

ってはいなかった。私が発した疑問は、私自身の内でしか解決の糸口を見出せなかったのである。

生命とは、紛れもなく意識である。そして意識は想いそのものである。人は覚醒状態にあるとき、一瞬たりとも想いなくして存在しえない。しかしその想いは「私の想い」であり、私は他者の想いを体験することは不可能である。それは死が、「私の死」でしかありえないことを考えれば十分である。雲一つ無い山頂に雪をいただいた富士を見て、私は私の想いを抱いて「美しい」という言葉を発したとしよう。隣人もまた同じ言葉で富士を表現したとしよう。「美しい」という共通の言語を用いて、私と隣人はそれぞれの想いを表現したのである。しかし私の想いと隣人の想いは、決して同一ではない。私にとって、富士は「私の富士」としてしか存在しえないのである。私が見た富士、私の想いによって眺めた富士は、私の個人的意識の内でのみ存在する。私の想いによらずして、私は眼前にそびえる富士を見ることはできないのである。ある画家の想いによって描かれた富士を私が見る場合であっても全く同様である。その画家が描いた富士を、私は私の個人的想いによってしか見ることはできない。およそいかなる実体も、私の外なるものとしては存在しえないのである。ここに「個と世界との調和」の原点があるように思える。学問の個人的意味は、まさにこの一点にあると私は考えた。「私の世界」を表現すること、それは「私の想い」を表現することでもあるのだが、私はそこに学問の個人的意味を求めたのである。

「私の世界」という一見非科学的表現が、私にはきわめてリアルに響く。しかし多くの経済学者達は、「私の」を取るべきだというであろう。世界を客観的に捉え、それを説明し予測する、これが社会科学の本来の目的であり、そこに「私」の入り込む余地はないというだろう。だが、世界をあるがまま（客観的）に捉えるとはどういうことなのか。なるほど私が見る見ないに拘らず、たしかに世界は存在する。しかしその世界は、私にとっては「世界は私とは関わりなく存在する」という仮定の下での存在にすぎないのである。私にとって、それは偶像以外の何物でもない。私の想いを通

して私が世界を見ない限り、私の意識の内のどこにも世界は存在しないのだ。私の内に存在しない世界をどうして捉えることができるというのか。かつてケインズは巷に溢れる労働者達を見て、貨幣賃金の下方硬直性を指摘した。もし彼の想いが別の方向に向かったとすれば、労働市場のケインズ・モデルは異なったものとなったであろう。

すべての人は、生涯を通してそのアイデンティティを表現する。死の瞬間まで表現し続けるのである。それは人間に課せられた最大の仕事であり、使命であり、生きる目的でさえあるように私には思える。したがって学問をするという営為は、個人的には何か特別な価値をともなうものではないことに気づく。なぜならば、それは人間としてのごく自然の営みにすぎないからである。

個と世界との調和は、死が「私の死」であることに立脚したときはじめて見えてくる。これが三〇年近く経済学と関わってきた私にとっての唯一の収穫である。

私の人生を変えた人・出来事

国際経済学部教授　大貫啓行

「血刀を振り翳して敵陣に切り込めないような指揮官に誰がついていくのか」

香港領事という外国勤務経歴を有する、当時の警察界にあっては飛び切りバタ臭い経歴の持主の先輩の口から思いがけない硬派の話が続いた。採用直後の研修期間中の十八人の同期生と並んで神妙に先輩の話を聞いていた。国家公務員上級職試験に合格し警察庁に幹部職員候補として採用された昭和四二年四月、二十三歳の春のことであった。

私達は採用直後の四か月間程、中野駅前の警察大学校内の寮に缶詰になった。拳銃射撃・柔剣道・水泳・行進・点検・号令の発声等々、警察官としての一応の心得を短期・即席教育されるのだ。その間、警察署に数週間見習い勤務するなどの実務研修も組み込まれている。つい昨日まで大学で自由気ままな生活をしてきた我々にとっての社会人としての第一歩は、程度の差こそあれ、いずれもいささかカルチャーショックを伴うものではあった。校庭に面した官舎の奥さん連はそうした可愛い新採用生の姿をカーテン越しに見て、「だいぶ様になってきたワネ」などと言っていたとか、いないとか。毎年、警察大学校で繰り返される年中行事のようなもの。そうした研修生を相手に先輩が幹部たる心得などを話しにやってくる。偉い大先輩の話は教室で授業として聞かされる。そういう先輩の話の前に

は担当教官たる二年先輩の助教から「なかなかうるさい先輩だから、けっして居眠りなどしないように」などと注意される。気さくな先輩は夕方寮にやってくる。中にはそのまま駅前の安酒屋に招待してくれる人もいて、そういう先輩は〝面倒見がいい〟として人気が出る。旧内務省にはそうした先輩が後輩の面倒を見るという伝統があったそうだ。私達の採用された昭和四〇年代初期まではそうした雰囲気が色濃く残っていた。上級職採用者は将来の幹部として最初から別格のエリートとして扱われた。仕事の場ではともかく、夜の宴席では採用間もない者が局長や本部長などと同席させられた。そうした扱いの中でそれに相応しい幹部としての素養を学ばせようという伝統だった。

土田国保先輩との最初の出会いは、警察大学校で私達にこうした幹部心得を話しに来られた折りのことだった。熱っぽく語る土田先輩は益々硬派の野武士のように思えた。先輩は昭和一八年内務省採用、後に警視総監から防衛大学校長になられた。海軍時代、浮き袋を部下に渡して沈みゆく艦から海中に身を投じ、長時間漂流の後、救助されるという逸話を持たれている。「血刀を振り翳して敵陣に切り込めないような指揮官に誰がついていくのか」とは、そうした逸話の主にして初めて語れる言葉だったのだろう。この言葉はその後の私の人生の折節に浮かんでは消え、また消えては浮かんで来たのだった。勇気と決断、ことに臨んでの気迫。くよくよせずにドーンと行くときは行かなければならない。そんな思いがなぜかジャングルでの戦闘で敵陣に先頭を切って切り込むシーンとなって何度も、しまいには夢にさえ浮かんできた。そこでは私は「血刀」を振り翳していた。

「紳士は背広にネクタイ。安物でも一着、役所のロッカーに吊しておけ。」

土田先輩は予定していた高級レストランでの奢りの宴を取り止めて、急遽ビヤーホールでの簡単な宴に場所を変更したのだそうだ。その日は初めからビヤーホールでの予定だったのかも知れないのだが、とにかくそう言ってこってりと説教されたのだった。私達は

警察大学校での初期の訓練を経て全国に配属された。たまたま私は同期生三人と共に土田先輩の勤務していた警視庁に配属されていた。そんな時期のことだったように思う。その日は午後になってから、急遽、先輩からの招集がかかったのだ。「夕刻五時三十分、警視庁刑事部長室に来るように」……と。こちらの都合がどうのこうのといえる時代ではなかった。大先輩から言われたら何をおいても馳せ参じる。そんな雰囲気の職場だった。集まった何人かの後輩を前にして、「君らは山だしの猿でだめだナア～」といったような土田先輩の憮然とした態度であった……ように思い出される。少なくとも私の記憶の中にあるシーンではそうなっている。

幹部候補生たる者、いつ何時でも一流のレストランにでも出入りできるような身支度ができるよう準備はしておけ、というのである。警察の第一線現場はそんな身嗜みよりは押しの利いたど迫力が重んじられる世界だった。背広にネクタイなどむしろ似つかわしくないという雰囲気であった。そんな職場に早く馴染もうとしていた私達は半袖のシャツ姿で辺り構わず動き回っていた。それが粋なものといったような感じで……。場の空気に馴染むのには若者は得意だ。髪振り乱して、荒っぽい職場の隠語もいっぱし口をついで出るようになった頃だったろうか。ナイフとフォークでの豪華なステーキを食い損ねたという思いと共に、なぜかこのシーンも忘れられない。食い物の恨みは忘れられないというのは本当のようだ。その時食い損ねたステーキの肉汁の匂いは甘酸っぱく一生続くのだろう。その後、土田先輩から何度も御馳走になったのに、最初の強烈な印象は妙に尾を引いている。海軍仕込みの先輩が粗野な我々に幹部候補生としての紳士の心得を教育してくれたのだった。

「警察官は犯罪人を捕まえるのが仕事であって、犯人を逃がすようなことはさせられない。」

物静かではあるが覚悟を決めた決然とした響きがある声であった。昭和五十年八月、総理官邸での夜更けのことだった（……ように記憶している）。当時警視

総監だった土田先輩が官邸に入って来たのは、ことが決まってからしばらく時間が経過していた。皆は黙って聞いていた（……と言うよりは、そうした沈黙状態の重苦しい空気はもうズッーツと何十時間も続いていたように記憶している）。

日本赤軍によるクアラルンプール事件の発生を受けて、『超法規措置』ということで犯人側の拘置中の西川、戸平、坂東ら五人の奪還要求を認めた時のことである。クアラルンプールのアメリカやスウェーデン大使館が占拠され外交官など五十三人が人質に取られていた。「人命は地球よりも重い」として日本政府としてはやむなく苦渋の決断をした。当時、三木総理はアメリカ訪問中で留守番役の福田総理代行以下、関係各大臣・次官・局長が居並んでいた。私は警察庁の課長補佐として官邸に派遣され、言わば電話連絡担当として官邸に詰め切っていた。官邸に集まった政府のお歴々はとにかく何も発言がない。ただただ腕を組んで座っているというだけ。時々、後ろに座った各官庁の課長などがそれぞれの官庁からの報告情報を前列の大臣・次官などに耳打ちしている。時折、そうした情報がその場で披露される。そうした形で、各官庁間での情報の早さなどを競い合っているという具合。肝心なことは誰も発言しない。発言しなくとも以心伝心で、皆、分かっている。日本と言う国はそういう国なのだ。何時間もそうしている。時折、「ウーーン」などという声が漏れ聞こえて来る。その内に福田総理代行が席を立つ。暫くして戻った総理代行を中心に、数人がうなずき合う。二～三人が静かに席を立つ。憲法も法律も無視する『超法規措置』決定という歴史的場面の私の記憶はそんなものだ。

福田総理代行は別室でアメリカに滞在中の三木総理と電話で話してきたのだろう。それを待って、担当法務大臣などがうなずき合ったのは「やむをえませんな」ということ。後は別室から電話で役所に「指示・命令」として伝達される。命を受けた官庁は拘置所から身柄を解放し、緊急車両で高速道路を東京へと運ぶという手際のよさということになる。わが国では空気が意味を持つ。黙って座っているだけで、お互い分かる

のである。その場の空気を共有しあうことによって。外国の人がもしそこにいたら驚くであろう。日本人は皆、訳の分からない気違いだとされるかもしれない。とにかく何も発言されないのである。私はこのシーンが忘れられない。わが国を支配しているのは不思議な空気であって、理屈ではない。ことを決するのは理論や論争ではない。醸し出されるその場の空気という感情（ムード）によるのだ……ということが分かった。国家の重大事項、例えば戦争を決断するといったことも、そんな空気が決めたのではないだろうか。そんな思いが深く沈殿していくように感じられた。

重苦しい空気が漂っていた。外では緊急車両がサイレンを鳴らして疾走しているだろうが、官邸はもうなにもすることはない。皆、ジーとしている。警視総監が入ってきた。警察庁長官や警備局長が警察を代表している席に、東京都を所管する地方担当者の警視総監が入ってくるのは異例であった。総監は暫く後方の席に座っていた。その間誰もしいて総監に注意の目を注ぐ者はいなかった。それ程、物静かな存在だった。

気がついたら総監は空いていた前の席に座っていた。そして物静かに発言していた。「警察官は犯罪人を捕まえるのが仕事であって、犯人を逃がすようなことはさせられない。」その場の者は皆静かに聞いていた。話が終わっても誰も発言しなかった。否、それは少々違う。正確には警察庁長官が顔色を変えてモゴモゴしていた。「もう決まったことだ。君は一体、何を言い出すのか」ということだったろう。警察としてはトップの長官がいる場の空気で決まったことは、総監が何を言ってもどうにもなるものではない。また、言うべき筋のものでもないだろう。

結果は解放された赤軍と共に飛行機乗って行く警察官は確か、警視庁の警察官から神奈川県警の警察官に急遽変えられただけだったが……。

私の人生を変えた人

外国語学部教授　中山　理（おさむ）

「主よ、我らここに居るは善し。」[1] これはイエスの変容を目撃した弟子ペトロが感極まってもらした言葉だが、この同じ言葉を、実は私も麗澤大学に入学してから自分の内なる声として実感することになったのである。私たちの人生に大きな影響を及ぼすものに人と人との出会いがある。中でも春秋に富む学生時代に、どのような師と出会い、その師からどのような人格的感化を受けるかが、個人の思想と人格とを形成する上で決定的な意味を持つことは言うまでもない。そのような意味で、麗澤大学は単なる学び舎ではなく、宗教的にまで美しい時間を提供してくれた楽園であり、心を磨く道場でもあった。私の高校時代は、まさにシェイクスピアが『お気に召すまま』でジェイクィーズの口を借りて歌っているように、「のろのろと歩く姿は蝸牛（かたつむり）、いやいやながらの学校通い」[2] の日々であった。それを思うと、麗澤での学生生活は、砂漠の強行軍的な受験勉強の末に辿りついたオアシスそのものだった。

大学では数多くの先生方からご指導を賜わったが、紙面の関係上、特に親しくしていただいた故大塚真三先生と大学院時代の恩師ピーター・ミルワード先生についてお話ししたい。その前に私が麗澤大学に入学するに至った経緯に少しばかり触れておこう。

当時の私は（今から二八年ほど前）、理科系の国立大

学を目指す浪人生だった。ちょうど父が事業を始めたばかりで経済的にも不安定だったため、「大学は国立で二浪は許さず」というのが、親子の間で暗黙の内に交わされた了解事項であった。あれは国立の入学願書を送る頃だった思うが、志望校をどこにするか絞りあぐんでいた私に、父は突然に麗澤大学受験の話を持ち出したのである。今でこそ麗澤大学英語学科は偏差値が六十を越える中堅大学であり、知名度も飛躍的に増しているけれども、当時は全く無名の大学であり、全国大学偏差値ランクも最下位だったと記憶している。一浪までして国立理科系を目指す私にとって、麗澤大学受験はまさに青天の霹靂（へきれき）だった。そのような息子の心の動揺を察してか、父は四日市中央事務所で麗澤大学の話を聞く機会を設けてくれた。その時親身になって相談にのってくださったのが熊本捨松氏で、お酒をたしなまれる氏は麗澤のすばらしさを次のようにわかりやすく説明してくださった。「ここにラベルが特級で中身が二級の酒と、ラベルが二級で中身が特級の酒があるとすると、あなたはどちらを選びますか…。麗澤は世間では無名で、ラベルも二級かもしれないが、中身は特級です。英語のほうはあまり勉強しなくてよいから、モラロジーという、しっかりした人生の学問を勉強してきなさい…。」

今までに出会ったどの進路指導の先生よりも説得力があり、熱意に満ち溢れていた熊本氏の一言で、私はこの大学にすべてをかけてみようと決心したのである。

「英語よりも人生の学問を」という言葉を心に刻みつつも、不安と希望の入り交じった複雑な気持ちを懐きながら、私は麗澤の門をくぐった。石にかじりついても何かを掴んでやろうと人一倍意気込んでいたのは、「経済的理由で、大学で勉強できるのは一年になるか二年になるかわからない。学費が払えなくなるときが、お前の大学卒業の日になるから、そのつもりでしっかり勉強してこい」という父の言葉がいつも頭の片隅にあったからかもしれない。大学といえばレジャーランド的なイメージが強いけれども、当時の私にはそのように学生生活を楽しむ余裕など微塵もなかった。

大学に入学して間もなく、故大塚真三先生の道徳科学の講義を拝聴するご縁に恵まれた。私はいつも一番前の座席を陣取り、先生のご講義を一字一句聞き逃すまいとメモをとった。ふたたび聖書の言葉を借りれば「鹿の渓水(たにがわ)をしたい喘(あえ)ぐがごとく、わが魂も」[3]すべてを吸収したいと喘いでいたのである。そのような、なりふりかまわぬ態度が目立ったのか、先生から「講義が終わったら、その日の内に講義内容をまとめて清書し、僕の家に持ってきなさい」とお声をかけていただいた。最初、頭脳明晰で、ずばりとものをおっしゃる先生には少々近づき難いところがあったけれども、その一方で、その飾らない、明るいお人柄に惹かれたのは、ちょうど『こころ』の主人公のように「どうしても近づかなければいられないという感じが、何処か強く働いていた」からである。そこでノートの左側のページには自分の予習したことをメモし、右側のページにはご講義の内容をまとめたものを清書して、先生にノートを見ていただくことになった。それからしばらくして先生から「大塚カンパニー」(先生を慕って集う学生のグループをこう呼んだ)のメンバーになるようお誘いをうけ、先生のお宅に足繁く通い始めるようになったのである。「お客さんとして僕の家に遊びにきているだけではだめだ」というので、カンパニーのメンバーにはそれぞれ簡単な作業が任されていた。私の担当は主に庭掃除で、先生ご自慢の庭の雑草をとり、芝刈機できれいに芝をかり、ゴミを拾い集めるわけである。作業には先生が参加されることも、学生だけで行うこともあった。作業が終わると、「よくやった。理(りー)くん、相当のものだね。」と必ずお褒めの言葉を頂いた(「りー君」とは私のあだ名で、先生は奥様を「ぐりちゃん」と呼ばれるなど、ユーモアのセンスもたっぷりであった)。気持ちよく汗をかいた後には、いつも奥様が心をこめて準備してくださった夕食が用意されていた。これがまた実に手間をかけた、愛情たっぷりの手料理だった。アメリカの大学では教員間でよく Eat & Drink Communication と称する会食をして情報交換を行うようであるが、大塚先生の場合は、これにさらに moral(道徳的な)という形容詞を冠すべき、家族ぐるみの楽

しい団欒であった。それは大学の授業だけでは味わえない、家族的な温もりであり、学生たちはこうして先生の人格の感化力を受けつつ、学生指導とはどうあるべきか、よりよきライフタイルとはどういうものかを肌で吸収していったのである。それ以来、先生は、私がいつお宅を訪れても嫌な顔ひとつせず、常に笑顔で温かく迎えてくださった。それは中学、高校時代には一度も経験したことのない教師と学生との繋がりであり、私が大学を卒業した後も変わることはなかった。私事で恐縮だが、オーストラリアのシドニーで結婚式をあげたときには、先生ご夫妻がわざわざ聖アンドルーズ教会での挙式に参列してくださったのである。

「英語よりも人生の学問を」という気持ちで入学したけれども、「学生の道徳実行はしっかり勉強することだから、感謝の気持ちを持って英語を勉強しなさい」というのが大塚先生のご意見だった。この先生のお言葉に励まされて勉強するうちに、また先生のすばらしいライフスタイルを拝見するうちに、いつしか私も麗澤大学の教職の末席を汚させていただきたいと思うようになった。そして大学院進学を目指し、大学受験の時よりも熱を入れて一日一〇時間は机に向かったのである。英語の勉強ではギャビン・バントック先生を始め英語学科の諸先生方にお世話になったし、授業以外でも川窪啓資先生の英文モラロジー、故宗武志先生の絵の会、道徳科学論文研究会（略して「論研」）、モラロジー研究所主宰の下程勇吉先生の「宗教的自覚と人間形成」の研究会など、心から感動を覚え、啓蒙される活動が数多くあった。帰省したときなど、他の有名大学へ進学した高校時代の友人と話をすることがあったけれども、私ほど恵まれた環境にいたものは誰もいなかったと思う。

そして上智大学大学院で英米文学を専攻することになったわけだが、ここでもまた、すばらしい先生との巡り合いが私を待ちうけていた。上智大学名誉教授、東京純心女子大学教授、カトリック神父のピーター・ミルワード先生との出会いである。上智大学大学院の博士後期課程で先生が私の論文を指導してくださったこと、そしてその後も翻訳などの仕事を通していろい

ろとご縁をいただいていることは、まさに冒頭で述べた、有り難い出会い以外の何ものでもなく、心から感謝の気持ちが湧いてくるのである。

このような限られた紙面では、大塚先生の場合と同様に、ミルワード先生のお人柄についてとても語り尽くせないので、私が自分の学力の欠如に悩んでいるときに、先生が下さった温かい励ましの手紙の一部を紹介して、その一助とさせていただきたい。

「…過去を振り返り、いかに多くの学問が蓄積されてきたかを考えるとき、そしてその学問を凌駕するどころか、それと肩を並べようと望むことさえ絶望的であることに想いを馳せるとき、私たちもあなたと同じ挫折感を覚えるものです。いかに多くのことを知っていても、さらに知るべきことが常に残されていますし、私たちよりも知識のある人が常にいるものです。ちょうど著作活動に終わりがないように、その著作活動に注がれる知識（あるいは無知）にも終わりがありません。したがって私たちに与えられた小さな一角の中で出来ることといえば『ささやかな最善』を尽くすことにつきるのです。私たちより知識のある人の眼から見れば、それはほんの僅かなことかもしれませんが、他の多くの人々からすれば豊かなことのように見えるのです。つまり、そのような知識は常に相対的なものなのです。しかし、相対的でないものが唯ひとつあります。それは私たちのどんな知識をも補いうる愛であり、その愛が知識(knowledge)を知恵(wisdom)へとかえるのです。知識量の多少にかかわらず、すべての知識は知恵へと至るのです。大切なのは知識ではなく知恵、いやむしろ、知識を知恵に変える愛なのです……単なる知識から知恵の高みへと高揚されることがなければ、そして純真な愛が欠如しているならば、学問の大部分が時間の浪費となるでしょう。これこそ、シェイクスピアが『お気に召すまま』で見せようとしたコントラスト、すなわち自分のヒツジたちを愛する純朴な羊飼いと、知識が飾り物やおもちゃでしかない、洗練された道化師タッチストーンとのコントラストなのです……」[4]

この「知識から知恵へ、知恵から愛へ」という先生

の言葉には、それがご自身のまさに実践されている生き方であるだけに、どれほど勇気づけられたことだろう。

大塚先生とミルワード先生は、ご趣味も、学問分野も、お人柄もそれぞれ異なってはいるけれども、ともに自己の中で学問と信仰、あるいは学問と道徳とが見事に統合されているという共通点があるように思う。ミルワード先生は、著書の数が三四〇冊を越えるシェイクスピアの権威であると同時に敬虔なキリスト者であり、一方、美学がご専門の大塚先生は花道界屈指の評論家であったと同時に、麗澤大学の創立者である広池千九郎の道徳思想の研究者でもあった。お二人とも、頭上にものを戴き、これを敬い服すという態度と、「一をもってこれを貫く」という不退転の心意気、そして余人をもってかえ難いアイデンティティとをお持ちだと思う。現在、自分がこうして教職に就き、生きがいのある人生を歩めるのは、両先生方を始め、数多くの恩人の方々、そして何よりも麗澤大学の創設者、広池千九郎博士のお蔭以外の何ものでもない。

大学のあり方が問われ、大学改革の必要性が声高に叫ばれる現在、麗澤大学も時代の要求に応じるために大きく変貌しつつある。その意味では、麗澤のラベルは良い方向に塗り替えられていると言えるだろう。しかしながら、いくら知名度があがり、規模が大きくなっても、この人を慈しみ育てるという伝統が失われては、また葉の下に実を隠す麗澤の校章まんりょうのように、表には見えないところで学生のために骨身を惜しまない諸先生方の至誠が忘れられては、麗澤の麗澤たる所以はないように思う。それこそ、心の時代と言われて久しい現代で、未だ確固たる羅針盤を持たずに漂流するかに見える学校教育に対して、麗澤が果たしうる根本的な大学教育の使命ではなかろうか。この光りて輝かぬ伝統の火を決して絶やしてはならない。

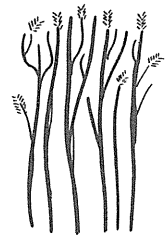
注

1 『マタイによる福音書』（十七章四節）
2 And then the whining schoolboy, with his satchel
And shining morning face, creeping like snail

And shining morning face, creeping like snail
Unwillingly to school.
(W. Shakespeare, *As You Like It, 2,vii)*

3 『詩編』（四十二篇一節）

4 この手紙の文面は『ピーター・ミルワードの世界』（沖積社、一九九五年）に筆者が寄稿したものの一部である。



一九九五年身辺雑感

外国語学部講師　瀬川真由美

その日、大学入試センター試験の試験監督を終えた足で新神戸へ向かった。かねてより、知人に神戸と京都を案内する約束になっていたのだ。夜景の眺望が美しい、美味しいと評判の店で夕食をとった。互いに盃を満たしつつ、仕事やプライヴェートの話題は尽きることがなかった。

翌日、異人館やモザイクを訪れ港を見ながら昼食を愉しみ、その後、三宮へ移動した。三宮の歩道橋を集団で行き交う晴れ着の若い女性たちに圧倒され、疲れ切って喫茶店に入る。店内の席に案内され腰をかけたものの落ち着かない。というのも、周囲にはやはり髪にカスミソウの花を飾り、紅、緑、紫などの地に、金糸銀糸の刺繍や、様々な色や模様を染め抜いた振袖姿の新成人が溢れていたのだ。それでも濃いめの熱いコーヒーが効いたのか、少々元気を取り戻し、店を後にする。三宮アーケード街を歩いて、その色彩の鮮やかなことにあらためて驚く。関東と関西の違いということだけでは説明され得ない感覚の隔たりを認識した。光る素材をあしらった靴の多さ、メークアップをしっかりしないと顔の場所すらわからなくなるのではないかというような色の洋服たち…。

ふらふらと歩いているうちに日も暮れ、大阪へＪＲで入る。大阪駅の近くにある店で「うどんすき」をつつき、当時私が住んでいた市内のマンションに友人と

ともに帰った。単身赴任ということもあり、女性専用であることとオートロックであることを条件に賃貸物件を探し、居を定めたのだ。駅の数にして大阪駅から二つ目で、通勤にも買い物にも都合が良く、オーナーが最上階（といっても六階だが）に管理人として家族で住んでいることから、何かの時には連絡を取り易いだろうと思い、見知らぬ土地での仮住まいとしてこの白タイルのマンションは十分であった。

翌朝、朝食もそこそこに京都へと急いだ。京都の街は広くはないが、見るべきものが多くあり、飽きることがない。ヨーロッパの教会とは異なった荘厳さを感じさせる神社仏閣、美しく迫力に満ちた彫像、時を忘れさせる庭園などなど。京都の人はその地にいつから住んでいるかでステータスが決まるのだ、と京都に住む同僚から冗談話しを聞いた。たとえば、「この間の戦争からずっと京都に住んでいる」と言う場合、その戦争とは「応仁の乱」を指すという。そんな他愛のない話しをしながら湯豆腐をいただき、明日からの仕事に差し支えないように早めに、京都駅で東京での再会を期して別れた。友人は新幹線で東京へと帰って行った。

阪急電車で梅田へ出て、デパートの地下で夕食と明日の朝食を買い込む。梅田の地下の喧騒には、そこに居るだけで体力が奪われていくようなエネルギーがある。人ごみの中を泳ぐようにして大阪駅へ行き、体を引きずるようにしてマンションに戻る。知らず知らずに大変な距離を歩いたらしい。泥のようになって眠った。

突然、揺り起こされた。何が起きているのかわからないが、覚醒してしまったらしい。ベッドごとトランポリンの上で、バスケットボールでもあるかのように、誰かにドリブルされているようである。夢？とりあえず上体を起こそうとするが、あまりの激しい揺れでバランスがとれない。しかも下手をすると、ベッドから振り落とされてしまいそうである。地震？まさか、生まれてこのかたずっと暮らしている東京に居る時ですら経験したことのない揺れである。ましてここは大阪、そんなはずは…。それにしても長い揺れだ。

ベッドにしがみついたまま、落ちないように力を抜かずにいた。このままこのマンションは倒れるのではないか、もし倒れたら、道を挟んだ向こう側の茶色の煉瓦貼りのオフィスビルによりかかる形になるのだろうか？それとも逆方向の駐車場に倒れるのか？倒れたらこの五階にある部屋も地上に近くなるのだろうが、どうやって部屋を出るのだろう？

何秒たったか、静かになったようなので、明りを点ける。部屋の半分が明るくなって気が付いた。フローリングの床の上でキャスター付きの家具が踊っていたらしい。動ける家具はみな部屋の中央に集まっている。やおらベッドから降り、玄関のドアを開け、靴の空箱をかませ出口を確保する。テレビを入れると地震があったことを伝え、ガス栓を閉め、落ち着いた行動をとるように警告している。東の窓から外を見ると、空がほんの少し白んでいる。と、その時、はるかかなたから何か音が聞こえて来た。海辺の宿で眠れずに聞いた波の音とも違う。空港で見上げたジェット機が残して行った音とも違う。真夜中にローリングする暴走族の音とも違う。地底から湧き出て来たような、いや地底をばく進して来るような、何枚もの布を一気に割くような、そんな音がした。足元が再び大きく揺れた。

テレビを見ていた。暗くて映像にならないので、被害の状況は伝えられないといった主旨のことを耳にしたように思う。きっとこの地震は全国ニュースになるであろうし、東京にいる家人が心配するであろうから、こちらから電話を入れた。まったく情報が流れていないらしい。少なくとも自宅の家人は揺れを全く感じなかったらしい。日本は意外に広いのだ、と妙に感心した。とにかく無事なのでどのようなニュースが流れても不安にならないで欲しいと伝えた。

この日、大学は休校となり、東京に戻った。家人は電話の後にテレビに映し出された画像を見て、ひどく心配したらしい。急いで大阪へ電話をかけ直した時には、すでに回線はパンク状態でつながらなかったそうだ。

数日後、大阪へ戻った。梅田の地下街では黒い服を

着た人たちが言葉少なに歩いていた。大学では事務官の方々が学生の安否を確認していた。教員は、学生が動揺しないように、平常通りの授業を行うことになった。混乱の中で、何か規則的な動きをする事柄を保とうとしたのであった。休み時間に、大阪や神戸の大学に奉職している同僚に電話をかける。本人は無事であったが、研究室のドアが変形し、書籍が散乱したため、仕事ができないと嘆いていた。他の同僚たちも怪我一つせずに済んでいたが、住居の高層マンションが大きく傾き危険なため、友人宅に避難している者や、家が壊れかけた者などがいた。しかし、ある教授の研究会仲間は瓦礫の下で、パジャマ姿のまま発見された。家屋は全壊していたが、玄関の方を向き片手を伸ばし、うつ伏せの状態で倒れておられたそうだ。今まで経験したことのない出来事や情報が私のそばを通り過ぎて行った。

この頃、しばしば知人の見舞いに訪れていた東京の病院で、極めて優秀な脳神経外科医師たちとお話しをするようになった。脳の部位による機能の違い、様々な障害とその治療法、全身状態の維持や血液の成分、脳死判定の難しさなどなどをレクチャーしていただいた。言語学に含まれる分野として失語症を対象にした研究もあるように、言語と脳は密接に関わっているため、臨床医との対話は、有益な時間であった。

脳機能障害が原因で、患者を障害者として認定する場合、いくつかの等級に区分される。一級、二級、三級というように、数値が小さいほど重度の障害を持つと規定されている。一口に障害と言ってもその認定基準の柱は二本あるように思われる。一つは意志伝達の可能性、もう一つは運動能力の有無である。前者は明らかに言語能力と関連している。こちらが発した言葉が理解できているかどうかが問題となる。例えば、医師が患者の手を握り、「手を握って下さい」と言い、それに対して患者がどのように反応するかを見るのだ。手に全く力が入らず握ることがなければ、意志伝達が困難であると判断される。不規則に手に力が入り、握ったり、離したりすれば、繰り返し「手を握って下さい」と呼びかけ、その文言に正確に反応しているのか

どうかを見極める。また、言語能力が失われてはいないが、運動能力が著しく損なわれている場合、その患者に残されている運動機能を用いて、意志伝達能力を測る。例えば、「まぶたをつむって下さい」などというように……。

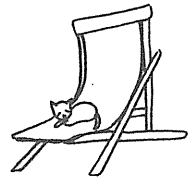
言語能力と言う場合、読む、書く、聞く、話すという表層的な事柄が教育現場などでは注目され易い。しかし、人間の思考能力とその思考の表出能力を問題とする場合、言語を一つの記号体系として扱わねばなるまい。

ある会社社長が入院しておられた。長期入院が決定的となり、正当な手続きを経て、ご子息が新社長に就任された。ご本人は自分に何の変化もなく、入院していることを不本意に思われているという。一日中付き添っておられる夫人にお話しをうかがった。入院する一か月ほど前から、話しのつじつまが合わなくなることが目立って来たという。会社の運営に関し、何か妙なことをおっしゃる。心配されたご子息が意見すると、お怒りになる。決算書を読む力も正常で他に何ら生活上の支障はない。しかし、時折、理解し難い方向に話しがそれるという。入院して三か月も経った現在では、日常に使用する単語に混乱が見え始めているという。例えば、「ワイシャツを着る」と言うのでワイシャツを持って行くと、「これじゃない。ワイシャツだ」と繰り返す。これがワイシャツであることを説明しても納得しない。結局、彼が欲していたのはコートであったそうだ。察するに、このご主人は着る物全てをワイシャツという単語で代用されておられるらしい。失語症の患者の記録を読んでも、使用頻度が高く、若い時から使用していた単語ほど失われ難いことが報告されている。ある抽象的概念は残るが、具体的な個別の単語は雲散霧消し、その概念を代表する単語が一つだけ消えずに存在し続けている例である。

意志伝達または言語能力を問う場合、個別の小さな事象、例えば、単語の選択や語順を問題にするのではなく、その個人の使用する言語を記号の体系として検証するという側面も必要であろう。この病院での一連の経験によって、言語を記号の体系として考察する動

機を再認識させられた。

一九九五年は忘れられない年となった。人間が抗し難い自然の威力を見せつけられた。また、人間を人間として成り立たせている要素を司っている脳の機能を思いがけず臨床で確認する機会も得た。詳述すればきりがない様々な出来事を熟成させ、研究と教育に還元して行くことが、私に課せられた使命であると思っている。



慈悲の内容をめぐって
―エコロジーからの問い―

外国語学部教授　欠　端　實

一、はじめに

地球環境の危機が深刻化し、共に環境問題を担うべき時代である。

自然を愛するという日本人の伝統は、近代以降現代に至るまで、自然破壊を防止する手立てとは、ならなかった。建学の理念であるモラロジー（道徳科学）においても自然環境破壊を阻止する明確な姿勢を打ち出すことができていない。モラロジーの理論が、伝統的な日本的ないし東洋的自然観に依拠しているためであると考えられる。『モラロジー概説』において、「環境改善と道徳心」の項に「価値観や生活様式を根本から考え直す必要にせまられている」とは記されている。しかし、慈悲の十か条の解説には、それとはっきりと明示された形では、何も表現されていない。慈悲がもっぱら人間中心的に説かれている。

モラロジーは自然環境破壊にたいしてどのような態度を取ろうとしているのか。そして、その根拠をどこに置こうとしているのか。今日の環境危機に対する処方箋は、根本的なところでの改革なしには不可能のようである。宗教の再生の他にはないだろうとも言われている（落合仁司「世界宗教の環境倫理」）。

そこで今日の課題である環境破壊の問題を手掛かりとして、モラロジーの神の原理（特に神の実質としての慈悲について）を再考したい。

二、エコロジーが問いかけるもの

（一）自然と人間の関係

①地球の有限性の発見

②道徳的判断の領域の拡大

二十世紀に入ってからの「地球の有限性」の発見、さらに環境問題や資源枯渇の問題は、人間以外のものとの関係をもモラルの領域とするよう訴えはじめた（J・パスモア『自然にたいする人間の責任』）。

③自然と人間の関係

自然を「人間のためにだけある」とする自然理解はもはや許されない。人間中心主義を放棄できないだろうし、その必要もないだろうが、今後は、いのちの多様な存在を維持すること、いのち全体をいかにして最大にするかということが、モラルの中身として入るべきであろう。

④自然の法則と人間社会のモラル

人間は、一方では、自然に帰属し、他方で、自然を超越した文化にも帰属する有限な存在でもある。今、両者の関係を再検討する新たな時代を迎えているようにみえる。

（二）従来の幸福・品性・慈悲の検討

幸福とは、人間と自然との関係がどのようになったときの状態を指すのか。品性を考える際にも慈悲を考える際にも、自然との関係を抜きにしては考えられないであろう。いずれにしてもエコロジーはモラロジー（最高道徳）の中核的部分の再検討をせまっている。

三、モラロジー、最高道徳の再検討

（一）自然的存在としての人間

人間は自然のはたらきに貫かれている（『論文』⑦二〇八）とし、したがって人間は、宇宙の成員として万有生育のはたらきを助けるという精神で一切の事に当たれと主張している（『論文』⑦二〇）。当然、自然を尊重することが人間の義務である、という主張になってもいいはずである。しかし、提示された社会のルールは人間中心的傾向が強い。今後、人間と自然が織り上げてきた風土の研究が必要かも知れない。

（二）いのちは誰のものか

いのちを神の所有であるとしている（『論文』⑦一四一）。さらにこの考えを展開して、地球を人間的に生きるに値する場所とするために、いのち有ることへの感謝と、それに基づく宇宙的報恩行為、いのち有るものへの「兄弟」としての目を持つことの必要性を訴えるべきであろう。

（三）いのちのはたらきを支えるもの

いのちあるものは本体（いのちのいのちともいうべきもの）の働きに支えられている（『論文』⑦二三一）。その本質を慈悲、誠とみる（『論文』⑦二三九、二五一）ならば、いのち有るものとの共存を図ることも又慈悲、誠であろう。「仁、草木に及ぶ」である。あるいは「仁、草木に及ぶ」をスタートにすべきなのかも知れない。

四、今後の課題

（一）モラロジーは、モラルの範囲の中に、宇宙自然の法則をも取り込もうとしておりながら、実際には人間中心主義に終始している感がある。モラロジーの理論が「いのち」を重視する考えを内包していることを想起し、人間の「自然的存在」としての側面を重視し、更にいのち有るもの同士が共存すべきことを理論化する必要があると考えられる。

①「いのち」を中心に—自ら「いのち」を与えられたものとしての自覚を持てると同時に、「いのち」を与えられた生きとし生けるものへの、対等平等な目が開かれていく。

②別々だが一つのいのち—共に「一つのいのち」を生きているものとして、「いのち」のつながりがあるという意識が持てる。広池の「兄弟神」、道元の「仏の御いのち」は同じことを指したものであろう。

③「いのち」の多様な存在を承認—総ては人間のためにのみ存在するのではない。それぞれの「いのち」にはそれぞれの目的と価値とがある。人間的な価値基準は一つの価値基準でしかない。

④「いのち」全体のつながりを保ち維持し、「いのち」全体を増やしていく、という考えを取り入れる。現在はあまりに人間中心的、個人主義的傾向が強い。

（二）神の実質としての慈悲の内容は、「いのち」を中心とする考えにたって再考すべきではないか。参考として、ジェームス・ナッシュの九つの「エコロジカルな徳」の項目を掲げておきたい。

①持続可能性―地球の再生能力、吸収能力、搭載能力の許容範囲で、無期限で継続的に生活を営むこと。

②適応可能性―存在のサイズに見合った倫理に沿った一貫した生き方をめざすこと。

③関係性―あらゆるものはつながり合い影響し合って存在しているという事実への鋭い感受性を培うこと。

④質素さ―地球に軽い負担しか強いない生活様式を善しとすること。

⑤公正さ―世界の物財とサービスを公正に配分すること。

⑥連帯―地球規模の連帯をめざすこと。

⑦生命多様性―それぞれの種の終極の時の到来まで、人間以外のあらゆる生物種が保存されるよう、棲息条件を健やかに保ちつつ、充分な個体数を維持すること。

⑧十全性―問題に見合った解決策を採ること。

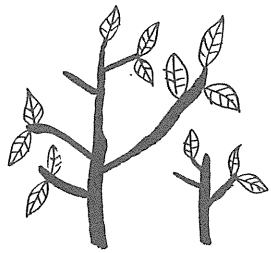
⑨謙虚さ―人間に達成可能な知識や技量、道徳的完全性の限界、人間という生物学的身分からくる諸制約を素直に受け止めることのできる人間らしい生き方をすること。

（三）自然を有限な「他者として」認識

日本人の自然への畏敬の念、自然を愛する気持ちは、自然の現状を見詰め、それに向き合うことを避けさせるという側面を持っていた。自然は無限に永久に存在するものではなく、有限な「歴史的存在者」である。自然との共存の道は自覚的に意識的に探っていかなければならない。自然の歴史に関与する場合は、慎重な態度で臨まなければならない。かくて人間の仁は草木に及び、同時に、草木は人間に仁を生ましめるという風土がつくりあげられて行くであろう。

参考文献

広池千九郎『道徳科学の論文』／J・パスモア　間瀬啓充訳『自然に対する人間の責任』岩波書店　一九七九／間瀬啓允『エコフィロソフィ提唱』法蔵館　一九九一／ロデリック・F・ナッシュ　岡崎洋監訳『自然の権利―環境倫理の文明史―』TBSブリタニカ　一九九三／中村友太郎他『環境倫理―「いのち」と「まじわり」を求めて―』北樹出版　一九九六／山折哲雄・中西進編『宗教と文明』（『講座文明と環境第十三巻』）朝倉書店　一九九六／尾関周二編『環境哲学の探求』大月書店　一九九六／オギュスタン・ベルク　篠田勝英訳『地球と存在の哲学―環境倫理を越えて―』筑摩書房　一九九六／間瀬啓允『エコロジーと宗教』岩波書店　一九九六／鈴木貞美『「生命」で読む日本近代』NHKブックス　一九九六／環境経済・政策学会『環境倫理と市場経済』東洋経済新聞社　一九九七



異文化とカウンセリング

学生相談室非常勤カウンセラー　水野　修次郎

私は、一九九四年度にアメリカの高等学校でスクール・カウンセラーのインターンをしていた。また、一九九五年度より三年間ヴァージニア州・フェアファクス市のカウンセリング・センターで心理カウンセラーとして働いた。さらに、母校のジョージ・ワシントン大学のカウンセリング室では週に二日クライアントを取っていた。私のアメリカでのカウンセリング体験は、子供から高齢者までと広い年齢層に渡る異文化との出会いであった。いくつかの体験を述べてみよう。

アフガニスタンから難民としてアメリカに帰化している少年に出会った。彼は、市民になる儀式に参加した興奮を誇り高く語ってくれた。その彼が、ある日、血相を変えてカウンセリング室に駆け込んで来た。彼の叔父の一家がロケット弾の砲撃で全員死亡したというのだ。彼は悲しみに打ちひしがれ、やがて、自分だけが生き残ったという罪悪感に苦しみ始めた。また、ベイルート出身の少年は成績が悪いので、このままでは留年になりそうという理由で教科の先生に伴われてカウンセリング室に来た。話を聞いてみると、彼は一年中休みをとらずに一日四時間の睡眠で働いていたのだ。彼は大家族の長男として家族の貴重な生活費を稼ぐ役割を担っていた。両親は政治的な理由により余儀なくアメリカに亡命して、今はかつての華やかな上流の生活とはかけ離れ、掃除夫として貧しい生活をして

いた。

さらには、コロンビア出身の少女は母親と三年間も会っていなかった。彼女の母や弟は祖国コロンビアにいる。経済的理由で父はアメリカに出稼ぎに来ているのだ。中南米の出身者の多くは二つ以上の仕事を持っていた。もちろん、日曜日はない。朝早くから夕方までの仕事を終えてから、次の深夜の仕事に取り掛かる生活だ。彼女には個室はなく、数人の親戚の人と一部屋を共有していた。

アジアから移民してきたM君は英語を使ってうまく自己表現が出来ない。もう三年も高校にいるのに英語がうまく話せないのだ。取っている授業は職業コースの科目が多い。自動車整備、調理コース、経理コース等である。出身国では学校が二部制になっていて、彼は午前中しか学校に通っていなかった。従って、解析や幾何などの数学や理科の教科はあまり勉強していなかったのだ。

このような移民してきた生徒を八〜九名集めてグループ・カウンセリングをしてみた。メンバーには実にさまざまな体験の持ち主がいた。叔父から性的な乱暴を受けて、その事実を母に訴えたが、逆に叔父を悪人呼ばわりしたとして家族から責められた少女。同じ歳の仲間が母国では兵士として戦っている少年。十代の母親。働くので忙しく、時間を見つけて睡眠不足を補う少年。民族の誇りが高く、苦しい生活にもかかわらず、弱みを見せてはいけないと教育されているアフリカ出身の少年。キリング・フィールドから生き残り、難民キャンプ生活経験をしたカンボジアの少女。中米でゲリラの兵士であった少年。体育のユニフォームを買うお金がないことを素直に言えずに体育をサボリ続けた中東の少年。

彼ら全員が目指すことは、高等学校を卒業することである。それが、アメリカの社会で何とかして生きる最低条件である。それにしても、彼らには活用できる資源があまりにも不足しているし、経験も貧しい。私は、彼らの話を聞いて深い絶望感に襲われた。だが、幸いに彼らには潜在的に高い能力が備わっていた。やがて、二・三回ほど会を重ねる内に、意外な展開があ

った。皆が英知を集め始めたのだ。まず、アメリカの社会ルールを知り、それに従って生きることは、必ずしも、彼らの母国の文化や伝統を捨てることにならないことに気付き始めた。つまり、二つのルール（アメリカと母国）を場に応じて使い分けることが彼らに利点をもたらすことに気が付いたのである。家では母国のルールで暮し、社会的にはアメリカのルールで暮らすことである。つまり、アメリカ社会の価値も受け入れる「こころ」の広がりが出来、同時にアメリカ社会の価値と自己の文化的価値を比較できる客観性を身につけたのである。

仕事で勉強や睡眠の時間が取れない少年は勉強と仕事が両立する仕事を探した。彼は義理のために無理をして深夜のレストランのウエイターを続けていた。仲間のルールが厳しいのにもかかわらず、勇気を奮ってボスに頼み仕事を離れる許可をもらった。そして、高校卒業までは昼間出来るホテルのルーム・サービスの仕事をすることにした。誰とも打ち解けなかったアフリカの少年が自分や家族の話を始めて、アメリカで始めての友人が出来た。性的な乱暴を受けた少女は、苦しみを背負ったままであったが、十八歳になるとすぐに家族から離れ独立の生活を始めた。家族との和解にはこれから多くの年月を要するだろう。しかし、彼女は安全で保護された仲間を持ち一時の安定を得た。子供を産んだ少女は、偶然に子供が出来たのではなくて、子供が生まれるのを望んでいた自己に気が付いた。彼女には子供を育てる必要性があったのだ。それは、自己の孤独な生活を終わらせ、新しい自分の家族を造る目的があった。彼女は実の母の援助もあり無事に卒業出来た。

これらは、決して問題が完全に解決したことにはならない。しかし、極めて絶望的に思われた状況が、保護された安全な空間を共有することによって、「固い殻」に覆われた自己が解け始め、やがて柔軟性が生まれてきた。カウンセリングの目的は、この柔軟性（resilience）の獲得にあると言っても過言ではない。

私も日本を離れアメリカに来たすぐは、「固い殻」に覆われていた。私のアメリカでの始めてクライアント

は、ポーランド系の魅力ある二十代後半の女性であった。彼女は妻子ある男性を好きになり苦しんでいた。私は、カトリックを信じる人が信仰と自己の情念との板挟みになり苦しむことがどんなことであるかを理解することができなかった。私は、やがて自責の念に駆られ自信を失っていった。教授や同級生の励ましにより、やがて文化の壁は、異文化の人と私の間にあるのではなくて、自己のこころの中にあることに気が付いた。自己のこころが壁に囲まれていると、クライアントや未知なものに対する恐れや不必要な強がりが生じる。理解を誤るのではないかという気持ちが異文化を理解する妨げになるのだ。

この壁を破るのは簡単であった。わからないことは素直に聞くこと。勝手な仮想をしないこと。また、どんなに絶望的な状況でも、人は問題解決に必要な心的資源を有することを信じることである。柔軟性とは、第二・第三の解決法が準備できることである。また、人生には失敗がないことを信じることである。なぜならば、失敗とはたった一つの方法が、たまたまうまくいかなかったに過ぎないからである。まだまだ、第二・第三の方法があるのだ。

今までの話は基礎編である。異文化理解の応用編には応用する道具がいる。私は、二つの世界観を用いた。一つは「自分を変化させる文化」と「他者を変化させる文化」の違いである。会社の仕事で苦しみ、自殺を企てたが幸いにも命をとりとめた日本の会社員がいた。家族も会社の同僚もその兆候に気が付かなかった。精一杯に自己を状況に適応させようと努力したが、その努力には限界があった。同じ状況のアメリカ人は、会社をさぼったり、旅行に行ったり、あるいは訴えたりして、自己の限界を超える前に会社や家族が変化することを求めるだろう。

次は、文化を見る方法—つまり「内側からの観点」と「外側からの観点」という二つの観点を用いて状況を判断することである。つまり、主流の文化（アメリカ文化）では個人の主張や独創性が評価されるが、例えばサブカルチャーの日系の文化では会社への献身や会社と個人の同一視が評価される。このように、主流

の文化（アメリカ）からの論理とサブカルチャー（アメリカの中の日本）の論理とが食い違う場合がある。その両者の観点から状況を判断する柔軟性が異文化と接するこつになる。

私は、アメリカ社会で、いわゆる比較的うまく生活している人と非常なる困窮を経験している人の違いに興味を持った。そこで、四十代や五十代の異文化出身の婦人を五十人ぐらい一人あたり一時間インタヴューしたことがある。そこでわかったことであるが、困難に合わなかった人は誰もいないことである。だれもが、戦争、経済、政治、健康、家庭内のトラブル、宗教問題などの何かの深刻な困難を経験していた。そのような困難を経験したにもかかわらず、ある者は比較的安定しており、ある者は不安定な生活をしていた。私は、その違いに決定的な役割を果たしていたと思われるのが柔軟性であると思った。柔軟性に富む人は、一つの失敗があっても絶望しないし、極端に不安定な生活に陥ることもない。つまり、第二・第三だけでなく、さらに無数の代替案が準備できる能力があったのだ。

異文化経験を述べた本稿は、実は、どこの世界においても共通する現象を記述していると思う。問題はどのような深刻な問題があるかではなくて、問題とどう取り組む（cope with）かが問題なのである。取り組み方が貧困だと、人生に未解決の多くの問題を持ち、第二・第三の代替方法を生み出す柔軟性や創造性に欠けることが多い。カウンセリングはその人が住んでいる文化や社会に受け入れられて、しかも創造的な方法で、その人が自己実現できるように援助することを目的とする。

カウンセリングを受けることは決して恥にはならない。問題を持ち、悩むことはむしろ成長にとっては歓迎されるべきことである。二十代は発達課題が多い（人生観・職業・恋愛・親や兄弟関係・友人・結婚・出産・子育て・健康・自己イメージ・宗教・信条等）。創造的で、社会に受け入れられる無数のやり方を育てる柔軟性――そんな可能性を追求したい人は是非カウンセリング室を訪れて下さい。

「咸臨丸」を学祭に出展して…

国際経済学部　丸山ゼミ

「咸臨丸」が麗澤大学のポスターになった

麗澤大学のポスターに、またパンフレットの表紙にも、咸臨丸の絵が登場した。我らのゼミの先生でもあり広報委員長でもある丸山康則教授からその由来を聞いた。

一八六〇年、日本人だけで初めて太平洋を越えていった船、軍艦奉行が木村摂津守、艦長が勝海舟、通訳がジョン万次郎、福沢諭吉も乗組員の一人だった。

一八五三年、アメリカから海軍提督ペリーが率いる四隻の船が太平の眠りをさましたのだった。やがて幕府滅亡のきっかけとなった和親条約の締結、さらには日米友好通商条約の批准のためにアメリカへ渡ることになる。

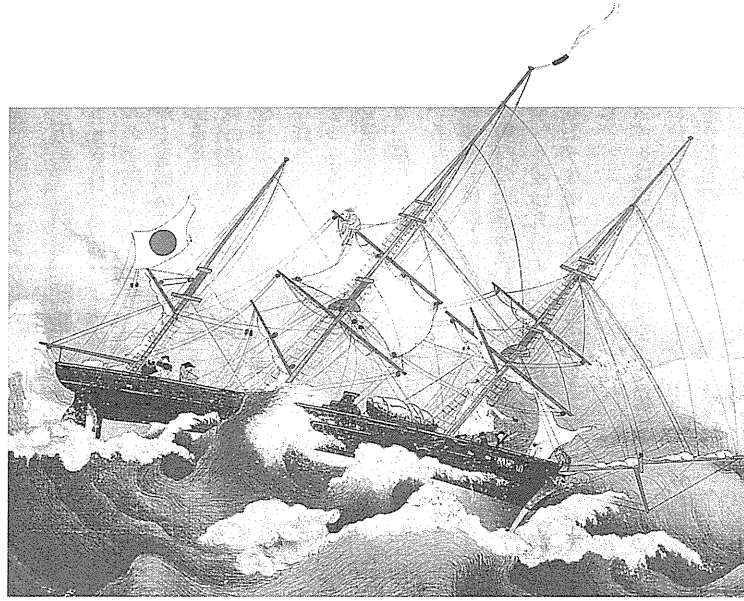
長崎に作った海軍伝習所で急遽育てた海軍士官たちが、オランダから買った船で護衛艦としてアメリカへ行く事となった。船の名は「咸臨丸」と名付けられた。『易経』からとられた言葉で、上の者も下の者も力をあわせて動かすという意味だそうだ。日の丸も初めて日本の国の旗として咸臨丸にひるがえった。国旗を掲げることが、すでに航海上の約束となっていたのである。徳川の葵の紋でもなく、天皇家の菊の紋章でもなく日の丸が誕生した。

品川を出港して三七日間、晴れた日は五日か六日と、全く悪天候の連続で海は荒れ続けたというが、一行はサンフランシスコへ着く、そして大歓迎を受けた。

何故、今、咸臨丸なのか。

勇気ある若者たれ、と丸山先生は言う。ポスターにも「アメリカはこの日本人を〝熱烈な魂と輝く瞳〟と賞賛した」と謳っている。なお、この絵を描いたのは

乗組員の一人だった鈴藤勇二郎、後に咸臨丸の艦長に



「咸臨丸難航図」複製図

咸　臨　丸

ペリー来航からわずか７年後（1960年）、太平洋を横断した日本人。咸臨丸の心は麗澤の心。

もなった人で、彼は無事帰って来てから神社に絵馬として奉納した。ただ実際の絵は今はなく、模写図が慶応大学の図書館にあり、それをお借りしてポスターにしたのだという。

ところで、青春は疾風怒濤の時代というけれど、そんな青春という状況や青春のもつ力強さを象徴している絵のようにも思える。　さて、やがて夏が近づき、秋十一月の学祭の準備が話題となる季節となった。

「われらのゼミも何かやろう」「そうだ、咸臨丸だ」

咸臨丸の展示をしよう。自分たちも良く知りたいし、多くの人にも知ってほしい。よし、やろう。話は決った。では、どうするか。

われらのゼミの得意技であるＫＪ法を使ってアイデアを出し合い整理することにした。

沢山意見が出た。表１がそれである。今、改めて見直してみて「うむ、これとこれは実現出来た」と満足感がこみあげてくるものもあるし、「これは出来なかったな。残念ながら次の機会に」というものもある。

表1

咸臨丸展示についての発想　一九九七・七・一六

展示、広告、模型、部屋

・四〇九教室は一号棟アーチの上にあるので、窓ガラスに展示アピールのポスターが貼れる
・せっかく黒板があるのだから咸臨丸展などチョークを使ってきれいに描きたい　（長谷川）
・咸臨丸の模型を作り、その横に自動車の模型も置いて大きさを比較する　（長谷川）
・模型を作ろう　（宮坂）
・模型をつくる　大きいのがいいと思う　（関塚）
・割箸で模型を作ったら面白い　（豊田）
・部屋の一部を再現する　（登田）
・いろいろな航海用具を示す　コンパスなど　（リオン）
・教室の装飾を咸臨丸のようにする　（森田）
・当時の船内の様子を詳しく調査し再現してみる　（五味）
・部屋全体を咸臨丸のように装飾して入ってくる人たちに当時を思わせるような様々な企画を用意する（アミューズメントパークのように）
・教室全体を咸臨丸の船内のように装飾する　（岡地）
・教室自体を咸臨丸にしてしまう　ドアを開けた瞬間、そこは咸臨丸のようなもの　（望月）
・咸臨丸の一部屋を作ってみる　例えば咸臨丸の食堂等　実際にお茶なんかが飲める　（森山）

説明する

・みんながその当時の姿をして客をもてなす　自分たちも展示の一部になる　（望月）
・咸臨丸についてみんなが説明できるように勉強して当時の服装をして御客さんに聞かれたことを説明する　（宮坂）
・一人一人が誰か人物に成りきって自分について語る　（前崎）

ビデオ、BGM

・BGMは海の音（波の音やカモメの声）を流す　（松尾）
・咸臨丸についてのビデオやテープを流す　（森田）
・咸臨丸についての本や写真やビデオなどを示す（リオン）
・咸臨丸の船内をビデオで説明を加えながら撮影し上映する（岡地）
・テープで説明を流す　（松尾）
・咸臨丸のビデオをとり展示の時放映する　（諏訪）
・写真やビデオを作り展示する　（佐藤）
・咸臨丸関係のビデオ　（橋本）
・字ばかりだと面白みがない　図や絵や写真をふんだんに使う　劇をする　（水野）

グッズ

・咸臨丸のプラモデルを作って売る　（玉井）
・咸臨丸と写真を撮ろう　ポラロイドで一枚一〇〇円　その場でプレゼント

インターネット

・出口で咸臨丸の問題を出す　（村上）
・インターネットを使って情報を集める　ホームページを作り学祭の時にホームページを見るよう呼びかける　（前田）

咸臨丸に乗る、体験記

・会社訪問をして話を聞く
・当時の船と咸臨丸を比較したりしてどれだけ咸臨丸がすぐれていたかなど展示する　（諏訪）
・咸臨丸青少年体験シリーズ　体験レポート
・咸臨丸乗船ツアーを企画し募集をかける
・安い値段であれば、みんなで咸臨丸に乗りに行く　そしてその時の写真をとって展示　（望月）
・咸臨丸の復元船をつくるにあたってのいろんなエピソードを会社関係者に聞いてみる　（佐藤）
・船を作った会社に行って集められる資料をすべて集める（関塚）
・会社の話を聞いてみる　（玉井）
・実際に乗り写真をたくさん撮り、当時の服装をする　（豊田）

歴史、事実、状況、エピソード

・乗組員の気持ちを代弁する　（森山）
　咸臨丸のメンバーの紹介　どんな人、どんな意識か　（森山）
・勝海舟、福沢諭吉の紹介、咸臨丸が彼らに与えた影響　（水野）
・当時の日本とアメリカとの比較　その船員に与えた影響（水野）
・乗組員の気持ちの代弁をする　当時の姿で演説をする　（森山）
・咸臨丸の歴史の説明
・咸臨丸の歴史を表や地図を使ってわかりやすくする　（松尾）
・咸臨丸でアメリカへ行っ時のハプニングや苦労を強調する（岡地）
・咸臨丸に乗っていた人たちの心理をさぐる　勝海舟、ジョン万次郎等…（玉井）
・歴史上有名な人も乗っていたが興味深い人物（有名でない人）があればそこに光をあてる　（橋本）
・咸臨丸の通った道のりを地図にかく　（宮坂）
・咸臨丸の成り立ちを模造紙に書く　（前崎）
・当時の時代背景を含めた展示　牛鍋ブームとか…（村上）
・咸臨丸を詳しく調べて展示する　（岡地）
・咸臨丸のエピソードを調べて展示する　（諏訪）
・本などの様々な資料から咸臨丸に関する内容を調べてまとめる初めて咸臨丸を知る人々にもわかりやすいように　（佐藤）
・咸臨丸が何をした船なのか　何の為に就航したのか　誰が乗っていたのか　（橋本）
・咸臨丸とは何かを発表する　なぜ麗大のポスターが咸臨丸かを説明する　（豊田）

＜咸臨丸に乗ろう＞

ひょんなことからと言うべきか、長崎のハウステンボスという会社の嶋津孝治さんが大学へ来てくれた。新聞広告に麗澤大学の咸臨丸の絵が出たのが嶋津さんの目に止まった。嶋津さんは、ゼミのなかで話してくれた。ハウステンボス社は現代の咸臨丸を作ったのである。何と、オランダに咸臨丸の設計図が残されていたのである。それをもとに一九九〇年に復元、オランダからアメリカのサンフランシスコへ、そして太平洋を渡って日本に来たのである。「今、横浜にいますよ。乗りますか。」「乗ります。乗ります。」七月の末から八月の初めにかけてグループに分かれて乗る事になった。その乗船体験も展示しよう。それに、オランダからアメリカ、そして日本へと航海した記録がビデオになっているということでそれもお借りして展示を賑わせることになった。「咸臨丸の模型もありますよ。」嶋津さんからのアイデア提供である。「それもよろしく」と、話はトントンと進んだ。嶋津さんは、さらに魅力的な話をしてくれた。「咸臨丸の乗組員のお墓が瀬戸内のあちこちにあるんですよ。」

咸臨丸の海軍士官は武士達で、いろいろの藩から集まり航海術や蒸気機関についてオランダ人から訓練を受けたのだが、港を出れば後は帆船だから昔ながらの操船が必要になる。そ

こで水夫としてかつての村上水軍の子孫たちが乗り組むことになった。だから、瀬戸内のあちこちにその人たちのお墓があるし、その末裔の人たちがいるわけである。「訪ねたいね」「面白いね」「わくわくするね」…。でも、この企画は夢で終わった。

＜歴史を調べよう＞

図書館は、本当に有効だった。実に貴重な資料の宝庫だった。咸臨丸の研究に取り組んでみなければ、手にとることも無かったような多くの本に触れた。久しぶりに歴史をしっかり勉強した。木村摂津守も、勝海舟も、中浜万次郎も、福沢諭吉も……。

＜いよいよ展示だ＞

枠を作り、模造紙に書き、写真を貼り、TVも二台、一台は勝海舟や中浜万次郎が話している。しっかり脚本を作って朗読役の語るのを収録し、肖像も立派な絵に描かれビデオカメラで撮影したものを放映した。もう一台は現代の咸臨丸のオランダから日本までの航海記録のビデオである。BGMは海の波の音のテープを流すことにした。

多くの人が見て下さり、沢山の人との出会いがあった

学祭が始まった。広池学長や大沢副学長、それに後援会長も見に来て下さった。「この資料は残しておいて、大学訪問で来る高校生たちにも見せてやりたいね」と大沢先生。「よく出来ているね。」「明治になって欧米を見に行った岩倉使節団のことも何時か調べてください」と声をかけてくださった人もいた。

学祭が終わった。やっぱりやってよかった。やり残したこともあったけれど、それはそれで新しい張り合いにもなった。

次に、出展した掲示の一覧（実際の掲示物は紙面の都合で全部を掲載することは出来ないので、掲示物の題名だけを掲げることにした）とゼミの人たちの感想を掲げる。これも青春の軌跡、人生の航跡と言ってよい。

掲示物一覧

- 咸臨丸速報　出港（森山）
- 咸臨丸の大きさ、積み込み品リスト（佐藤）
- 初代咸臨丸関連年表（岡地）
- 初代咸臨丸について（森田）
- 第三の開国（望月）
- 江戸時代後期（リオン・チーワン）
- 木村摂津守（紫村）
- 勝海舟（玉井）
- 福沢諭吉（豊田）
- ジョン万次郎
- 現代の咸臨丸の処女航海
- 咸臨丸の処女航海と入港地
- 海と人とのふれあい
- 咸臨丸に乗って・・・・

＜咸臨丸に乗り組んで、みんなが考えたこと＞

咸臨丸を終えて

勝海舟が船酔いでほとんど仕事ができなかったことや、お米や水など、どのくらいの量を積み込んでいったのかなど、詳しく知ることができて、とても面白かったです。恥ずかしながら、具体的にどんな人物が乗っていたのかを知らなかったので、よい勉強になりました。どうして彼らはあんなに意識が高かったのだろうと思います。

できたら、咸臨丸の水夫の子孫をたずねてドキュメンタリーを作りたかったです。有名な人物だけでなく、彼らもまた勇気ある日本の代表なのですから。日本人だけによる初の太平洋横断にどんな思いをもっていたのか、興味があります。

私は四月から銀行員になります。咸臨丸について学び、外国との競争が始まるのだという意識が強まりました。まさに第五の開国です。彼らが勇気をもって出発したように、私も頑張らなければならないと思いました。

森　山　ひさこ

●初代「咸臨丸」関連年表

西暦	年号	太陽暦	太陰暦	
1856	安政3	6月		ヤパン号（後咸臨丸）オランダ・キンデルダイク、フォップ・スミット造船所で起工式
1857	安政4	3／6 9月		ヤパン号完成、軍港へレフートスロイスを出航 （長崎海軍伝習所第二次教官団団長カッテンディーケ、医官ボンベ以下37名の第二次教官団一行が乗船） ヤパン号長崎に到着、引き渡される
1858	安政5	2月 3月		咸臨丸、五島・対馬を巡航 （カッテンディーケ、海軍伝習所大目付木村摂津守、艦長役勝海舟ら乗船） 咸臨丸、平戸から下関海峡をへて薩摩に至る、島津斉彬が来訪
1860	万延元	2／10 2／13 3／17 5／9 5／26	1／13 1／19 1／22 2／26 3／9 3／19 4／7 5／5 5／6 9月	咸臨丸、品川を出航浦賀へ寄港 咸臨丸、浦賀を出航サンフランシスコへ向かう （軍艦奉行木村摂津守、教授方頭取勝海舟ら日本人一行96名〔木村の従者として福沢諭吉、通弁主務としてジョン万次郎〕と案内役としてジョン・M・ブルック海尉艦長らアメリカ人11名の計107名） 遣米使節団を乗せたポーハタン号横浜を出航 咸臨丸、サンフランシスコに到着 咸臨丸一行、ポーハタン号の遣米使節を出迎える 咸臨丸、サンフランシスコを出航 咸臨丸、ホノルルに寄港、国王カメハメハ4世、王妃エマに謁見 咸臨丸、浦賀に投錨 咸臨丸、品川沖に到着 遣米使節団帰国
1861	万延2		4月	小栗豊後守ら咸臨丸にて対馬事件解決のため現地へ
1862	文久元	1／18 3／3 3月		咸臨丸、小笠原諸島回収測量に出発 （艦長小野友五郎） 咸臨丸、アメリカの捕鯨船に遇う 咸臨丸、品川に帰港
1866	慶応2			咸臨丸、大修理、機関をはずし帆船として使用
1867	慶応3			咸臨丸、軍艦籍から除籍　輸送船として使用 咸臨丸、新政府へ納められる
1868	明治元	8／19 9／18		咸臨丸、榎本武揚率いる開陽丸以下7隻の艦隊に属し品川を脱走 咸臨丸、駿州清水港で官軍富士山丸、武蔵丸、飛竜丸より攻撃を受ける
1869	明治2	8月		咸臨丸、大蔵省の所管から北海道開拓使に移される
1870	明治3	5月 9／19		咸臨丸、民間の回漕会社木村万平に運航を委託 咸臨丸、旧仙台藩片倉邦憲の家臣400余人を乗せて箱館発、小樽に向かう途中荒天のため渡島国上磯郡の泉沢海岸で座礁破砕

岡地　翠

初代「咸臨丸」について

咸臨丸は一八五六年にオランダで建造が進められ、翌一八五七年に完成、そして長崎に回航しました。

一八六〇年には、浦賀を出航、ポーハタン号に先んじて、サンフランシスコに入港、日本人がはじめて太平洋横断渡米の壮挙をなしとげた船として歴史に刻まれることになったのです。咸臨丸には、優秀な海軍士官が多数乗船しており、彼らのほとんどは長崎海軍伝習所で航海術を学んだ面々でした。

勝海舟らは、サンフランシスコで砲台、病院、造幣局などを見学、特に市の議会政治の見学はアメリカの民主主義、自由平等社会を目の当たりとすることとなり、彼らに多大な影響を与えました。

咸臨丸は初の太平洋横断という輝かしい史実とは裏腹に、その最期はみじめなものでした。渡米の役割を終えた咸臨丸は、小笠原諸島の領土確定のために測量などで活躍したものの、一八六六年には機関をはずされ、帆船となり、軍艦籍から除籍されました。幕府倒壊から明治政府への移行にともない、新政府へ納められたものの、一八六八年には榎本武揚率いる開陽丸以下七隻の艦隊に属し品川を脱走、本隊とはぐれた咸臨丸は駿河湾で官軍軍艦富士山丸の攻撃を受け乗船員が惨殺され、その後北海道開拓使の運搬船となりました。最後は、民間の回漕会社に運航が委託され、一八七〇年、函館から小樽に向かう途中、台風のため座礁、建造以来一四年間の数奇な生涯を閉じることとなったのです。

咸臨丸を調べる前に知っていたことといえば、勝海舟を乗せてアメリカに行った船、ということだけでした。しかし、今回、咸臨丸について調べてみると、今まで知らなかったことが次々に発見され、とても興味深く思いました。そして、咸臨丸が建造された当時の造船技術の水準の高さにとても驚くとともに、咸臨丸の乗船員らの太平洋横断という快挙は素晴らしいことと思いました。

森田亜樹

咸臨丸についての展示を終えて

〝熱烈な魂と輝く瞳〟―咸臨丸。

私には咸臨丸についての知識というものは、まるでなかった。初めてその話を耳にしたのが丸山先生の講義の中であり、その偉大さを知ったのもその時であった。

〝上の者も下の者も心を合わせて動かす船〟という意味で名付けられた咸臨丸。これを聞かされた時、妙に納得した。というのも、私もこの大学生活の集団という枠の中で、上下の関係というのは本当に困難だということを身を持って体験したからだ。

今や日本は、第五の開国と言われており、まさに私たちはその時の中にいる。そんな私たちのあるべき姿はどんなものであろうか、やるべきことはなんであろうか。現代の日本は崩壊の道を進んでいると言っても過言ではないであろう。その中で私たちは、舞台を日本から世界に変え、世界にも引けを取らない若者になっていくべきではないか。

望　月　あかね

〈感　想〉

今回、学祭で、威臨丸を発表するに当たり、私は、実際に咸臨丸の復元船に乗せていただきました。六時間程の遊覧でしたが、私は一時間後には船酔いのためダウンしていました。勝海舟が船酔いで、太平洋横断の間、ほぼずっと寝込んでいたという話を聞きましたが、私は六時間の遊覧の間、彼が経験した気分を十分に味わいました。でも、このような機会でなければ咸臨丸に乗ることはなかったと思うので、とても貴重ないい経験をしたと思ってます。

今回の発表で、私が担当したのは主に咸臨丸の積み込み品リストでした。リストをながめてみても分かるように、食料、燃料共に必要最低限の物しか積んでいないにも関わらず、咸臨丸は長期間に及ぶ太平洋横断を成し遂げたのです。これは驚くべきことだと思います。私は、この発表を通し様々なことを学びましたが、麗大のシンボルマークにもなっている咸臨丸を、これを読んだことを機にもっと沢山の人々に知って欲しいと思います。

佐　藤　純　子

ジョン万次郎について調べていくと、ジョンと言う名前の由来（船の名前からつけられたあだ名である）や、アメリカに渡るまでにすでに英語を話していたこと（万次郎は英語を耳で覚えた）、などなどいろいろなエピソードが次から次へと出てくるのである。先にあげたのは、それらを掻い摘んだだけで、ここにあげていないエピソードもたくさんある。結局、明治維新後は日本の政（まつりごと）のために、その英語力を使う機会はほとんどなかったと言ってよい。江戸時代には、国の外に出る事自体がものすごく重い罪で、日本に戻って生きていられただけでも運が良かったと言える。江戸時代の末期に、単身でアメリカに乗り込み、アメリカ社会で対等に渡り合うことのできた万次郎のことをもっと知りたいと思いました。

橋本陽子

学祭でうちのゼミが咸臨丸について発表することになったと聞いた時、私は初めて聞いた名前で何にも知りませんでした。しかし、この咸臨丸について勉強して、はじめて知ったことが、たくさんありました。初めて米国に渡った船が、この咸臨丸だったということも。それなのに意外なことに、あまりそのことを知らない人が多い、ということも事実です。本当は、もっともっと一般に知らされていてもいいはずなのに……。

ところで、私は、勝海舟についての本や資料などを読んで、その人柄を少しは知ることができたわけですが、勝さんの船に対する熱い思いと、厳しい人だけど仲間への温かい思いなど、とても人情味のある人だということがわかって勝さんに興味がもてました。私もその時代に男として生まれていたら、こんな人のあとについて学びたいと思いました。

麗澤大学でとりあげたのを発端として、どんどん社会にこの咸臨丸の志が広がってゆけばいいと思います。

玉井千佐子

日本は古くから朝鮮半島や中国大陸と往来し、その影響を受けて発展してきました。しかし、ヨーロッパ

やアメリカからは地理的に非常に遠かったため、その文化にふれる機会はほとんどありませんでした、黒船の来航を機にヨーロッパ・アメリカという他者に直面させられ、独立を保つためにその「文明」のほうにみずからを開き、変革してゆかざるをえなかったのが、開国という経験でした。いい機会だったと思いませんか。

リオン・チーワン

今回咸臨丸を勉強して、今まであまり気にかけなかった麗澤大学のポスターに、より関心が持てるようになりました。

太平洋横断という偉業を断固たる決意で成し遂げた軍艦奉行木村摂津守を初め乗組員達、荒れ狂う波を乗り越えるその意志は見習うべきことが多くあります。咸臨丸は「無気力化」といわれる現在の多くの若者にとって大変影響を与える出来事では無いでしょうか。自分も狭い範囲にとらわれず広い視野で物事を考え、行動していきたいと思いました。

豊田啓志

咸臨丸を取り上げることによって、日本について考える機会を得た事は、私にとって大変意義深い事だった。

日本は今、第五の開国を迎えんとしている大切な時なのに、大抵をぼんやりと暮らす私でさえ危機感をつのらせるほどガタピシしてきている。

〝何の目標も見出せない不安な時代〟だとある売れっ子作家が今日もTVで変わり映えのしないコメントをしている。日本がアジアのリーダーになるべきだなんて、今の所、私には大それた話に感じてしまう。精神的に大人になりきれないまま社会人になり、日々忙しさに明け暮れて、自分とその周りの人々の事だけで精いっぱいな日本人。現代の咸臨丸に乗っている私達は、実はあんまり余裕が無い。

最近よく雑誌などで、二〇代〜三〇代OLの〝自分探し症候群〟という特集を目にする。他人事でないからついつい見てしまう。〝普通じゃダメ〟〝私の居場所はここじゃない〟という思いから転職を繰り返したり、大した目的も見つからないまま留学をしたりす

る。〝私はこれをやっているのだ〟と胸を張って人に言える仕事がしたい。でも、何をやったらいいのかわからない。自分という大きなストレスを抱え、いつまでも出口を見つけられない伏態に陥る。その結果ますます自分がわからなくなり、自分探しに明け暮れる。そんな人々の総称らしい。

かく言う私も、この大学生活の四年間は随分と自分探しをしてきた気がする。本来なら高校の時点で将来のビジョンを描き、それに沿った大学に進まなければ、社会に出て直ぐには使いものにならないだろう。自分探しは、その時期に一通り終わらせるのがベストだと思う。でもこの問題は難しくて、私にはなかなか解けなかった。自分の確固たるアイデンティティを確立しようと焦ってばかりいた。でもそのうち、本当の自分は探しても見つかるものではなく、今この場所に造り上げていくものなのではないだろうかという結論に達し、どんな内面を抱えていたとしても自分を頼りに生きていこうと決めた。そして、まずは世の中を見極める眼を育てていこうと思い、日本経済の一端を担う金融業界に進路を決めた。

幕末の志士達はその方法が正しかったか間違っていたかはともかく、日本の将来を真剣に見つめ、行動を起こしていった。そして新しい時代がやって来た。私たちが第五の開国を迎えるにあたって必要な事は、自分の内面やその半径何メートルにしか向けられていない眼を、ほんの少しだけでも外に向ける事なのではないだろうか。

水野桃子

咸臨丸に乗って、木村摂津守や福沢諭吉、ジョン万次郎たちが海外へ行き、さまざまな知識を得たように、私たち学生もこれからは海外に目を向け、世界規模で物事を考えなければならない時代が到来したように思います。現在、企業活動のグローバル化、情報化、環境化などにより、世界規模で政治、経済などの相互依存関係が緊密になったと言われています。テレビや新聞、インターネットにより、地理的空間、時間的空間が縮小し、いつでも海外事情を知ることができるよ

うになりました。

大学のパンフレットに描かれた咸臨丸が象徴しているように、私は世界規模で世の中の動きについて関心を持ち、世界の中における日本はどういう立場に立っているのか、また、これからの企業のあり方について勉強していきたいと思いました。

前田晴美

時代を超えての贈り物

咸臨丸って何？？あーあー、あれね！というのが僕が初めて資料を見た際の感想でした。

今回の展示では咸臨丸の乗組員のことなど細かいところまで調べたのですが、彼らは冒険心だけでなく新しい時代を創るために彼らの生死をかけて太平洋を横断しサンフランシスコに到着しました。

それにひきかえ自分は!!とその時、まざまざと感じさせられました。何にもしなくても生きていられる、別に流れに流されていれば生きていられる時代にいる自分！

僕らは彼らのように冒険心を持ち、失敗を恐れず新しいことにどんどんチャレンジして自分自身を磨き、刺激のある生活を毎日送っていかなくてはいけないと感じました。どんなに辛いことがあっても新しい明日に向かってドキドキしながら楽しんで毎日を送っていこうと思いました。

咸臨丸は時代を越えて現代の我々に勇気を与えてくれました。

仁平康博

丸山ゼミ名簿

丸山康則　教授

国際経営学科三年

岡地　翠
佐藤純子
諏訪ふさ子
玉井千佐子
豊田啓志
仁平康博
橋本陽子
長谷川浩之
前田晴美
松尾有希子
望月あかね
森田亜樹
リオン・チーワン

国際経営学科四年

五味愛子
紫村拓也
関塚女玲
辻本　勉
二斗蒔由香
前崎幸子
水野桃子
宮坂麻紀
村上あれい
森山ひさ子
矢萩祐子
李　傅煌

※平成九年度

少林寺拳法部雑感

少林寺拳法部　監督　山田研一

一、はじめに

私が、この大学の少林寺拳法部の監督に就いてから約十年が過ぎようとしています。その前に、田口耕三前監督の指導のもとにコーチとして、約九年間この拳法部の活動を手伝っておりましたので足掛け二十年、麗澤大学の校門を通ってきたことになります。

このように長く、学外の人間が拳法に関っていることは、他の大学の拳法部でも珍しいようで、四国の香川県の多度津町にある少林寺拳法の総本部とのやり取りでも『縁ですね』と不思議がられます。

このように長く続けられた理由の一つは、私の住まいが本学の近くにあるということがあげられますが、この大学の拳法部と関り合いを持ち続けたいと思った動機は、このクラブの創部当時、合宿の時に見たある出来事からでした。

それは、このクラブがまだ同好会から部へ昇格したばかりの夏合宿の時のことで、本大学の国際経済学部の高巌助教授が中心となり活動をしていた頃のことです。私が、田口先生と一緒に、午後の稽古のために道場に入ったとき、まだ清掃中でした。そこで見た光景は、今でもしっかりと脳裏に焼き付いています。それは、一年生から四年生まで全員が一緒になって、道場の雑巾掛けをしているのです。その光景は、多くの大学の拳法部の幹部が見たら「信じられない」と思うも

のでした。

私は、大学に入り少林寺拳法と出会い、四年間をいわゆる体育会のクラブの中で過ごしてきました。その当時、四年生の幹部や三年生の準幹部が、自分たちが稽古をする道場の掃除をしている姿は、見たことがありませんでした。

私も四年生の幹部のときは、「掃除のような雑務は何もしない」で、過ごしてきましたし、田口先生も他大学の出身でしたので、私と同様、「幹部になったら何もしない」というのが当たり前で、少林寺拳法の拳士であるから、一緒に道場の清掃をするということはなく、これは、本大学の校風ではないかと思い、心を打たれました。私は、本大学の卒業生でもなく、モラロジー教育との関係もない者でしたので、当時本大学のことは全く知りませんでしたからなおさらのことでした。

ここの拳法部は、他の大学の拳法部と異なった優れたものを持っている、すばらしい伝統を作り上げられる種子を感じました。「たかが清掃、されど清掃」というのでしょうか、当時の四年生、三年生の行動は立派なもので、この様子が、私を今日まで本大学の拳法部との関係を継続させた理由と思っています。

「少林寺拳法」は、開祖宗道臣先生が第二次世界大戦中、中国大陸にわたり、その折、達磨大師の座禅で有名な嵩山少林寺に伝わる精神と身体を鍛えることを目的とした禅門の行としての修業方法を中心に、他で修得した武術を加えて集大成したもので、「自己確立」を目指すことを目的とした、精神修養と護身鍛錬、健康増進を備えた武道で禅の形式を残しています。

従って、清掃などの雑務は、「作務（さむ）」と称して少林寺拳法の修業方法の一つとされています。四国の香川県の多度津町にある少林寺拳法の総本部の稽古後には、必ずこの作務があります。しかし、稽古前に自主的に作務をすることは、ほとんどありません。稽古前の道場の清掃を全員で行うという行為は、本大学のすばらしい一面が現れているのではないかと思っています。いまでも、部員たちは、稽古の前に清掃を皆で行っているようです。連綿と受け継がれて、部の伝

統になっているようです。

二、伝統を作るということ

少林寺拳法は、昨年、創始五十周年を迎えました。しかし、剣道や空手などの他の武道に比べれば、その歴史はまだ浅いと思います。「伝統を作る」ということで、生前、開祖が私が学生の頃に話されたことに「メッキ」と「飯碗」の話というものがあります。少し長くなりますがお付合いください。

「メッキ」の話というのは、「私（開祖）は、自分のことをメッキと思っている、決して無垢ではない。しかし、三十ミクロンくらいの厚いメッキである。厚いメッキであるから、長いあいだメッキとは知られずにずいふん時間が経ってから、本体が現れ『これはメッキか』ということになる。しかし、その間、多くの人は無垢と信じ大切にする。これが伝統というものだ。少林寺拳法も最初から素晴らしいものではなく、厚いメッキにおおわれていて無垢と信じたその教えが代々受け継がれて本物になる。それを引き継ぐのが君達学生である。」

次に「飯碗」の話、「ある人が一万円の飯碗を手に入れた。飯碗は、毎日使うものだから毎日洗うわけで、その際、値段を知っている者は、この飯碗は一万円もするのだからという気持ちが丁寧な取扱をするだろう。しかし、値段を知らない者は、その者の洗う姿を見て、「そもそも飯椀というものは、このように扱うものだ」ということを受け継ぎ、次の世代に伝えることになるだろう。以後は、粗末な飯碗になっても大切に扱うことになる。それが、伝統というものになる。学生の少林寺拳法は、その多くが体育会という組織の中で色々なことを、先輩から後輩へ引き継いでいく。中には良い伝統というものもあるが、悪いものもある。良いものは、後輩たちに伝え、自分が受けて、いやだと思うものは自分の代だけで終わらせ、良き伝統を守る努力をして欲しい。」というものです。創立当時の三、四年生は、他の大学の拳法部と違って、彼らが最初の「厚いメッキ」であり、「高価な飯碗を手に入れた者」でしたので、立派な部員達であったと今でも思っ

ています。

三、後輩に伝えるということ

少林寺拳法の場合、あまり高校のときに経験している者が少ないので、技の全てが初めてのものばかりで、先輩から後輩に正しく伝えていかないと技にならないということが起きてきます。このことから、少林寺拳法の技は、「面受面授」で後輩に伝えていくことが大切になってきます。今の部員たちは、少林寺の練習といっていますが、以前は、稽古といっていました。この意味は、先人の技術を何度でも繰り返すことで、その技を体得するという意味が込められています。

昭和五十年代は、先輩が必ず後輩に正確な技を伝え、その蓄積が教えた先輩が技を体得するまで要した期間より、後輩は短くなり、次の世代は、それよりも又少し短くなる、という繰返しでより高度な技を体得することができていました。その結果、ある代では、全国大会三位、千葉県大会優勝というような成績を生むことができました。これも稽古をすることにより、経験が濃縮して後輩に伝えることが出来たからと思っています。しかし、昭和六十年頃から留学制度ができ、部員の多くが六ヵ月または一年間と留学により部の活動を休むことが多くなりました。このブランクは、本当のところ部の活動にとっては、痛手です。多くの部員は、「留学先でも拳法の法形はやっていきます」といって留学しますが、やはり「面受面授」の場がないので、その成果はあまり現れていない、というのが現実です。しかし、本大学で海外に留学できるということは、学長が卒業式の祝辞で述べられている「国際人として、あれ」ということを体得するのには重要な意味を持つと思っていますので、こういう状況の中で、部の活動をより効率的にし、技を伝えていく工夫をしながら努力していくことが、今では大切な課題となっています。

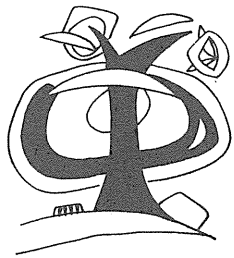
四、道場のこと

麗澤大学の少林寺拳法部にとって、他の学校に誇れるもの。それは、専用の道場があることです。少林寺

拳法は、他の武道関係に比べその歴史が浅いものですから、私の稽古をした道場も相撲の土俵の上が稽古場でした。それも六月以降は、相撲部の部員が使うので、その後は、体育館の屋上のコンクリートで、雨の日は、体育館の通路で稽古をしていました。それを思えば、麗澤大学の少林寺拳法部は、恵まれた環境の中にいます。これも各代の部員がまじめに稽古を積み、かつ、大学の顧問の中山理先生をはじめ学生課の皆様のご支援の賜物と、感謝をしています。

その道場の中に、畳にすると三枚分位の大きな鏡があります。この鏡は、現在の武道館の前に稽古場にしていた、柔道場の頃から在るもので、少林寺拳法部の活動を見つづけているものです。この鏡には、ちよっといい話があります。それは、初期の頃の部員がどうしても自分の形を見るために姿見（すがたみ）が必要だと思い、部員がアルバイトをした資金で購入したものだということです。

少林寺拳法の教えの中に、「半ばは自己（わがみ）の幸せを、半ばは他人（ひと）の幸せを」という言葉があります。当時は、自分のために購入した鏡も、後輩には掛替のないものとして残っている。ここの拳法部には、本当にいい財産が在ると感じています。



底辺からの出発

スキー部主将
国際経済学部国際経営学科四年生　山本昌寛

●競技スキー

皆さんは、スキーというスポーツをどのようなイメージでとらえているだろうか。ほとんどの方は、遊びのスポーツというイメージが強いのではないかと思う。

ところが、スキーにも様々な競技や種目があり、その中でも私達麗澤大学スキー部は、アルペン競技を中心に活動を行なっている。その他にも、ジャンプ、クロスカントリー、モーグル、バレー、エアーなど数多くの競技や種目があるが、アルペン競技は旗の間を滑り、そのタイムを競うという単純なもので、他に比べたら特別な用具や複雑な技術などを必要とせず、誰にでも簡単に入門できるため、私達はアルペン競技を中心に活動を行なっている。

アルペン競技には、いくつかの種目がある。高速系の滑降、スーパー大回転、技術系の大回転・回転があり、それらの違いは旗門の幅が広いか、狭いかということで、それによりスピードが変わってくる。一番距離の短かい回転でも全長五百メートルから、六百メートルもあり、有酸素運動と無酸素運動とで分けるならば、無酸素運動の部類に属す。陸上競技に例えるならば、四百メートル走と同じだ。長野オリンピックで男子滑降のスタート地点が問題になったのを覚えているだろうか。その滑降はとても過酷な種目で、五つの大

切な要素、勇気、スピード、技術、ジャンプ、そして体力があり、そのいずれを欠いても競技の本質は保てない。最高時速百三十キロメートルを超えることもあり、滑降の選手には筋肉中の乳酸値の限界からさらに粘り続けることのできる資質が求められる。その様な資質をもった選手が専門のトレーニングを積み、さらに能力を高めることで、やっと勝利をつかめるのである。

●オフシーズン

時々、「スキー部って、夏は何をしているの」という質問をされることがある。やはりスキー部は、スキーだけに冬しか活動をしていないと思われているらしい。しかし、私達にとって、オフシーズンはとても重要な期間なのだ。まず第一に体力づくりをしなければならない。競技スキーは、オフシーズンにどれだけトレーニングを積んだかで勝敗が決まる。トレーニングの目的は、競技力の向上にあるが、それは次のように規定できる。競技力＝体力×技術。つまり、スキーの技術があり、いくら上手くても体力がなければ勝てないのだ。

第二に、オフシーズンの間に冬の合宿や、大会のために資金を貯めておかなければならない。私は、スキー部に入部してから、スキーというスポーツは本当にお金のかかるスポーツだということをつくづく思い知らされた。大学に入学する前までは、スキーに行くとしても、日帰りや長くても三日間ぐらいだったので、それほどお金もかからなかった。しかし今では、合宿でも最低一週間はスキー場に籠もっているし、スキーの大会は一日では終わらないため、同じく一週間は大会開催地に滞在している。このような合宿と大会の繰り返しが、シーズン中数回続くのだ。その他にも、スキー板を買ったり、スキーウェアーを買ったりと、とてもお金のかかる部活動なのだ。

この様に、トレーニングをして体力を付けなければならないし、アルバイトをして冬のために資金を貯めなければならないという、相反する二つの事をしなければならないのがスキー部の特徴だ。

そのため、私達の活動は週一回のミーティングとそ

の後の全体練習、そしてその他のアルバイトが入っていない日に、各自が自主トレーニングをするという、週一回しか部員全体が集まれない制限された活動になってしまうのだ。

●麗澤大学スキー部

私達麗澤大学スキー部は、前項でも述べた通りシーズンは、週一回ミーティングを行なっており、そこでは主に連絡事項や、部費の徴収、そして部員間の意見の交換や、冬に向けての目標の再確認などの話合いを行なっている。特に話合いは、入部してからスキーシーズンに入るまでの期間が長い、私達スキー部にとってとても大切で、シーズンに入るまでに部員の気持ちを最大限に引き出さなければならないからだ。

ミーティングの後に行なう全体練習にも、競技力の向上以外の目的があり、ミーティング同様、部員の気持ちを高めていくということである。オフシーズンが長いため、スキーから気持ちが離れていってしまう部員もなかにはおり、特に一年生は一度も合宿を体験しないままオフシーズンを過ごさなければならないため、その傾向が強い。そういった傾向を解消するため、なるべく練習には筋力トレーニングなどの基礎トレーニングの他に、スキーをイメージできる様なトレーニングを行なっている。

今では、この様にスキー部の体制ができているが、私が入部したての頃は、ちょうど改革の時期だった。

スキー部の創部は、一九九一年とまだ歴史は浅いが、その頃はただ単にスキーに行って楽しむという、レジャー感覚の部だった。それが、私が入学する前年の一九九四年あたりから除々に競技を始めだしたそうだ。そのままレジャー感覚で部活をつづけたいという部員と、競技を始めるべきだという部員の二つに分かれ衝突が起き、多くの部員が退部していったらしい。私は、後者の競技を始めるべきという考えが正論だと思う。部活をやっている以上それは、学校の名前を背負っているわけで、それなりに結果を残していかなければならないと思うからだ。私は、大学二年、三年と主将と務めてきたが、常にそのことを念頭に置いて活動してきた。

●スキー部の発展

私がスキー部の主将を務めることになったのは、大学二年生の時からだ。本当ならば、三年生が務めるべきなのだが、留学に行って休部していたり、様々な要因が重なり、私にその役が回ってきたのだ。主将になるということが決定したのは、一年生の十一月頃で、つまり一度も冬の合宿を経験しないまま決まってしまった。何もスキー部のことを知らないまま主将という大役を引き受けるということと、先代の主将の頃からスキー部の改革が始まったというのを聞かされていたということもあり、私にこの大役をこなすことができるのかという不安があった。不安を抱いていても何も始まらないので、私は計画を立てた。二年間主将を務めることが決まっていたので、「二年計画」という安易な名前ではあるが、計画を立てたのだ。

初めの一年間は、何もスキー部のことを知らないで主将になったため、勉強の年にしようと考えた。勉強の年と言ってもスキー部のことを知ること以外何もしないわけではなく、スキー部の体制を確立しようとしたのだ。というのも、それまでのスキー部は、週一回のミーティングと、二回の自主トレーニングという活動を行なっていたのだが、活動日数が少ない割りには部員の出席率があまりにも悪く、そして部員としての自覚が足りないため、何事に関しても人任せという積極性のない部員があまりにも多かったからだ。この二つを解決するには、意識改革が必要と考え、私は部員にもそれぞれに重要な仕事を与えることにしたが、あまり効果は得られなかった。

しかし、人間は目標を持つと変わるもので、目標を持った途端に部員が変わりだした。その目標というのは、学生スキー大会の花形、全国学生岩岳スキー大会の本戦に出場することだ。毎年予選は二月の下旬、本戦は三月の下旬に行なわれている大会で、体育会の部活だけではなく、サークルも参加できる選手層の厚い大会なのだ。その大会に参加して予戦を通過し、本戦に出場するという、競技を始めて一、二年の部活動にとっては、無謀な目標なのだ。ちなみに、その前年にも大会に出場したのだが散々たる結果だった。

ところが、その年は違った、予戦を通過するどころか　本戦でも上位に行きシード権（次年度の本戦出場権）を獲得できたのだ。

二年計画の二年目は、改革の年にしようと考えていた。そこで私は、二年目に突入する前に、どの様に改革をしていこうか考えていたのだが、今まで協調性のなかった部員達から色々な意見がでてきたのだ。目標を達成できたからだろうか、いつのまにか部員間でまとまりができていたのである。部員からでてきた意見に、全体練習というのがあり、それを実行してみることにしたが、大成功だった。今では、ほとんどの部員がミーティングや、練習に参加する様になり、大学生活を有意義に過ごしている。

●麗澤大学の部活動のこれから

今まで述べてきた様に、私達スキー部には歴史がない。麗澤大学の他の部活も同様歴史が浅い団体が多い。そのことは、部活動をやっている学生にとって、とても良い環境にあると思う。昔からの意味のない様な厳しい習慣や、決まり事がないため、自分達で創っていけるからだ。その環境を無駄にしないためにも、学生一人ひとりが高い意識を持ち、部活動に励むことが大切だと思う。

もう一つ、麗澤大学の学生全般に言えることだが、保守的な傾向が強いと思う。部活動に関しても、もっと外部にアピールする様な活動を行なっていくべきと思う。今のままでは自己満足にすぎない。前にも述べたが、大学から援助を受け大学の名前を背負って活動している以上、常に上を目指し、大学の名を外に広めるのが、私達の務めだと思う。

そして、よく学生生活がつまらないという声を耳にするが、それも保守的という所から来ていると思う。何かを人にしてもらおうと思うのはいけない。自分から積極的に求めていくべきだと思う。そういった積極性と向上心を持って、現状に甘んじず、後輩達には頑張ってもらいたいと思う。

バレーボールと私

バレーボール部（女子）主将
外国語学部英語学科三年生　柏　亜希子

時々、何か他のスポーツをやってみたいなと思います。特に、高校、大学に入る時など節目の時は今度こそと思い、なに部に入ろうかなといろいろ考えましたが、結局中学からずっと変わらずバレーボールを続けています。私が以前から、そして今も時々考える本格的にやってみたいスポーツというのは、テニスです。テニスは個人戦で、ミスをしてもだれにも迷惑をかけることがないし、負ければ、すべて自分の責任だからです。人間の真の強さを知ることができる気がします。しかし、やはり新しいことをするには勇気がいり、その勇気がない私はついつい、入学式でもらった部活動紹介のパンフレットのバレー部の欄を、一番先に見てしまうのでありました。

高校の時は、決して強いチームではありませんでした。チームの平均身長も低く、部員数もやっとベンチが埋まるぐらいでした。そんな部活でしたが、やるからには強くなりたい、そんな私たちの気持ちにバレーボール初心者だった先生は、一生懸命に指導して下さいました。ありったけの知識で時には厳しく、また、くだらない冗談を交えながらの練習でした。当時の私には、きつくてつらいもので、帰り道はその日の先生の言動に友達と愚痴を言い合ったものです。しかし、バレーボールの競技人口はとても多く、普通の高校生が幾分厳しい指導を受けたからといって、試合に勝て

るようになるわけはありません。バレーボールのために寮に入って、授業以外はバレーをしているという学校もあるのですから、当然です。最後の大会もあっけなく負けてしまいました。部活がおわった私たちは、今までの先生に感謝の気持ちを表したくて、独身の先生に一週間私達が交替でお弁当を差し入れすることに決めました。あの時の先生の照れた顔は忘れられません。そして、先生がいつもおっしゃっていた言葉も忘れられません。「いつも周りを気に掛けること。周囲に気を配れない人間は社会ではやっていけない。」

大学に入学してからも、やはりバレー部に入りました。しかし、男子部のマネージャーになろうと決めていました。受験のときにお世話になった先輩がいましたし、女子部はあまり活気がないときいていたからです。そしてなにより、「気を配る」ということを、必要とする仕事だったからです。それでもやっぱり、なんとなく自分でもプレーしたいと思う毎日が続きました。そんなときにある先輩から、「女子部の雰囲気が嫌なら、自分で変えればいいじゃない」と言われました。私にはできないと、言われたときはそう決め付けてしまっていましたが、やりたいことはやった方がいいという結論に達し、女子部に入ることを決意しました。そして、私が女子部に入部した理由がもう一つあります。それは、私が迷っていた時期の少し前に入部していた知り合いの先輩から、女子部に入ってほしいと頼まれたからです。

現在、部員数は決して多くはありませんが、部に行くことは苦ではありません。高校の時のように先生が指導してくれるわけではないのでつらい時もありますが、やりがいもあります。先程の、私に女子部の入部へ背中を押してくれた先輩、黒岩希里子さんは、留学中にもかかわらずこちらの部の状況を心配して、練習メニューの助言、来年の計画などを送ってくださいましたし、就職が決まった四年生は、時々練習に参加して下さいました。四年間一つのことをやり通すというのはとても大変で、本当に好きでないとできないと思います。しかし、見方によれば、一年生が主役となってしまいがちなサークルより、部というのはだれもが

主役になれる場だと思います。また、楽しい時間だけでなく、つらく苦しい時間を一緒に過ごしたものの中には、連帯感や仲間意識というものが強く現れると思います。

最近は、個人主義といって他人とあまりかかわらないようにするという人が増えています。みんなが一緒、ではなくて、個人を別々にみるやり方。みんなが一緒では子供っぽい、だれにも頼ることなく、自立することがよいというふうに考えている人がいます。しかし、本当は人が集まってみんなで行動する方が、ずっと勇気がいり、そしてその中で自分が行動することが、本当の自立なのではないかと思います。それは、大勢の中で競争をすることを意味しているのではなく、他人を感じて自分が行動するということです。もちろん、様々な感情が湧き上がります。決してプラスのことだけではありません。しかし、それを乗り越えた時の達成感はすごいものだと信じています。

バレーボールは、六人でプレーをします。一度コートにボールが入ったら三回で相手コートにボールを返すわけですが、単純に計算すれば三人、コート内の選手の半分がボールに触ることになります。一人一人のプレーが大切で、次のプレーに大きな影響を与えます。例えば、どんなにうまくスパイクを打つ選手がいても、トスが上がらなければ打つことはできないし、レシーブがセッターのところまで上がらなくては、いいトスはあげられません。また、サーブが入らなければ、ゲーム自体が進行しません。ここがバレーボールの魅力であり、臆病な私が嫌いなところです。もし自分がミスをしたら全体のミスに広がることもあるからです。しかし、味方のミスをうまくカバーし、それを決めた時の感激もひとしおです。

練習中で私が一番好きな時は、自分の掛け声が体育館中に響く時です。声を出すことによって疲れは増しますが、みんなの動きもよくなっていくように感じますし、なにより活気が出ます。そして、練習後にも、楽しみがあります。みんなで話し込んだり、夕飯を食べに行ったりすることです。次の試合のこと、来年のこと、部活のことだけではなく授業や共通の友達の話

しで盛り上がったりする事もあります。部活の仲間は、私の生活には欠かせません。

新年度から私は部長であり、またキャプテンも勤めることになります。キャプテンのやり方、考え方がそのままチームに反映されるため、キャプテンの色がチームの色になります。そして、私達の目標は、四月から始まる春季リーグ、または九月の秋季リーグで八部に昇格することです。

現在私たちが位置する九部リーグは各大学の実力にあまり差がなく、ほんの少しの油断が負けにつながってしまいます。実際昨年も、勝てるはずの試合を油断したために落としてしまったことが何度かありました。そのような試合の後は、自分たちの甘さを大変悔やみました。油断する事なく、確実に勝つにはどうしたらよいか。もちろん、自分のプレーに自信が持てるような練習は絶対に必要です。練習量と練習内容が充実していれば、自然と自信につながります。しかし、私たちは部活中心の生活をしているわけではありません。学生であるため、やはり本分は学業です。また、アルバイトをしている学生も少なくありません。部活に当てることのできる時間も、自ずと決まってきます。そんな中で、チームを勝利に導くのは、個人の精神的強さとチームの団結力であると思います。

前にも書いた通り、バレーボールには流れがあります。その流れを作るのは、選手一人一人であり、また、それをまとめるキャプテンといえます。私は、自分の存在がチームにいい影響を与えることのできるキャプテンになりたいです。自分のプレーや声で、他のプレーヤーにやる気を与えられるようになりたい、そして試合中には、ミスしたチームメイトに気の利いたフォローがいれられるようになりたいです。

私達学生は、自由な時間がたくさんあり、やる気があれば何でもできると思うのです。私はバレーボール以外にもいろいろな活動をしています。自分の学生生活をより魅力的なものにしたいと思い、両親をはじめ、様々な人のご理解の上にいまの私が成り立っています。その人達に感謝を忘れずに活動していきたいと思います。これからもご協力のほど、お願いします。

E.S.S.の活動と目的・課題

外国語学部英語学科三年生　E.S.S.部長　土佐和也

一、活動状況

E.S.S.は九八年一月現在、四年生を含めて三十六名の部員で成り立っており、昼休みは毎日三十分、放課後は週一、二回で一時間半の活動をしています。昼の活動は、全体をディスカッション、リスニング、即興スピーチなどの各セクションに分け、決められたスケジュールにしたがって、その日の担当セクションから、さらに担当者を決め、その担当者の用意した題材について活動します。放課後は、セクションは関係なく、担当希望者が自分の独自性に任せて用意した内容で行います。放課後の活動は、参加人数は昼よりも減りますが、昼にはできないようなものもできるので、活動内容としてはたいへん濃いものになります。

年間を通しての活動ですが、大きく分けて、対外交流、大会、合宿と、三つのことがあります。まず、対外交流としては、神田外語大学E.S.S.との合同活動を前期は神田外語大で、後期は麗澤大学にて一度ずつ行っています。合同活動の後には一緒に食事会をするなどして、回を重ねるごとに交流が深まっていることも実感しています。次に、大会に関してですが、他大学E.S.S.とは規模も編成も異なる麗澤大学E.S.S.は、参加できる大会といえば今のところスピーチコンテストのみです。学内では、スピーチコンテストを主催し、他大学で行われるスピーチコンテストにも参加

します。最後に合宿は、春季、夏季の長期休業中にそれぞれ三泊四日程度で行います。この合宿期間中は出発の電車に乗ってから帰りの電車を降りるまで、日本語禁止です。活動も、普段はできないディベートやドラマにも挑戦します。

以上が大まかな毎日、そして年間のE.S.S.の動きです。

二、E.S.S.の活動の意義

前述のとおり、E.S.S.は様々な活動をしているわけですが、その活動の意義は何なのでしょう。入部当時の目的としては、日常会話がスムーズにできるようになるための練習の場を求めて、というものだった自分ですが、これまでの二年間で、E.S.S.自体の目標や方針がそれとは少し違うところにあることがわかって来ました。E.S.S.はもともと「English Speaking Society」の略ですから、文字どおり、英語を話すことが最大の目的になります。それに加え、「英語部」として、英語をただ話すのではなく、英語を使って自らの主張をするスピーチをしたり、様々な議題に対しても十分意見交換できるようになることもまた、大きな目的になります。したがって、活動内容にもスピーチやディスカッションといったものも取り込まれます。

しかし、部員がすべて同じ程度を求めているかというと、そうでもありません。完全に留学や英語圏での生活を意識して高いレベルを目指す人もいれば、自分が当初そうであったように日常のおしゃべり程度でよいと考えている人もいます。細かいことを言えば、スピーチ大会で賞を狙いたいと思う人もいれば、スピーチなど生活には特に必要ないからいらないと思う人もいるので、普段の活動内容そのものへの意気込みも人によって様々です。そのような人たちが、同じE.S.S.という組織のなかで活動しようとすると、部員同士の意識を合わせることはとても難しいことです。

ただ、ひとつ言えることは、E.S.S.のような、特に大きな発表の場のない文化部は、個人の自己満足だけがやりがいになるということです。ですから、今現在の英語力がみんなバラバラでも、それ以上を目指すということには変わりはないわけですから、自分が満足

できるように楽しく、かつ真剣に活動することが必要になります。その前向きで楽しくする気持ちがない限り、E.S.S.に所属し、活動する意義はないと思います。

三、部活動としてのE.S.S.

E.S.S.は部活動です。しかし、いつでも聞かれるのが「え、部活なの？」ということです。この質問はさすがにこたえるものがあります。しかし、実際のところ、これは部員たちにも責任があると思います。部長としてこんな文章の書き方では情けないところですが、現在自分の思っているところなので、正直に書かせていただきたいと思います。

現在E.S.S.は年間通しても、毎日の活動のなかでもいろいろなものに取り組んではいますが、活動の幅としてはまだまだ拡げる余地があるとは思います。しかし、「部活なの？」の疑問は、この活動の幅よりも、何か他に違うものがあるように思えるのです。それはというと、まず文化部であるがゆえの地味さ、結果のなかなか見えない活動、そして各部員の部員としての意識の低さだと思うのです。部活動としてのE.S.S.をアピールするためにまず考えなければならないことは、部員一人ひとりの部員としての自覚づくりだと思うのです。

先ほど述べたように、E.S.S.の部員は個々に別々の目標を持っています。ですから、自己満足が大切だといった反面、他人のことを考えない性質も持ちやすい状況ではあると思います。その結果として、部としてのまとまりの悪さを生むことになります。共通の目標が作りにくいというのは、自分が入部した当初から感じていることで、それは現在も変わっていません。しかしながら、部として存在するためには、部員一人ひとりが自覚を持って部を構成し、まとまりを作らなければなりません。部という存在は、しっかりした組織のように見えて、実は非常にもろく、構成員がしっかり支えていない限り簡単に崩れてしまうと思うのです。現在E.S.S.では、それぞれの部員の部員たる意識が欠けているのかもしれません。それゆえに周りからは「部活なの？」と疑問視されてしまうのでしょう。

この意識改革をすることが当面の部全体の、ひいては部をまとめる部長である自分の目標になると思います。

四、世代交代

自分がE.S.S.に入ってから三年目を迎え、今の全体の雰囲気を、自分が一年生だったころと比べると、明らかに違うものになっています。二年前、自分が新入部員としていたときは、留学経験や会話の実力をもった多くの四年生が在籍し、またそれに続く三年生も部長、副部長を中心に、E.S.S.の活動について模索していました。それから一年経ち、英語力の高い四年生が卒業し、当時の三年生も四年生となり実質の活動の主体から抜けてしまいます。それに加えて、新三年生は三人とごく少なく、部長は二年の自分がすることになりました。しかし実際のところ、いろいろ模索するうちに一年過ぎてしまったというのが率直な感想です。

現在のE.S.S.は、まさに、活動方針や内容の改革が迫られている時期にあると思います。良いとか悪いとかの話ではないのですが、部員が変われば雰囲気が変わっていくのも当然です。それが、世代交代というもので、この世代交代に伴って部内の活動方針の改革、実際の活動内容の見直しがなされなければなりません。伝統も大事ですが、それを守るばかりでは、部の新陳代謝は行われず、マンネリ化して、いつしかその活性度は低下します。部は存続しますが、部員は常に変わっている訳ですから、各世代で常に新しいものを求めていくことが必要です。これからのE.S.S.は新しい世代が自分たちの目標の達成のために必要と思われる活動をどんどん取り入れ、部そのものの状態を活性化させていきたいと思います。

五、この二年間で得たもの

最後に、ごく個人的な話ですが、自分自身、E.S.S.に二年間在籍し、二年生で部長をやったことで得たものは何だったのかこの場を借りて振り返らせていただきたいと思います。

まず、E.S.S.は英語に触れる機会を増やしてくれました。自分は英語学科ですから、大学の授業ではも

ちろん毎日多くの時間を英語とともにしています。しかし、「話す」ということなると、会話の時間や、ネイティヴの先生方の時間ぐらいになります。E.S.S.は、毎日、少しずつでも英語を話す機会を与えてくれます。これによって、英語を「話す」ことが、入学当時よりはずっと楽になったように思います。話すのもそうですが、人の話していることを「聞く」のにも慣れました。高校時代まで全くといっていいほど英語を「聞く」機会を得ようとしなかったので、今でも「聞く」能力は劣っています。しかし、自分より英語を上手に話す先輩、仲間たちの英語を聞いて、また顧問のスウェイン先生の英語を聞くうちに、少しずつですが、それも良くはなってきているのだと思います。

それともう一つ、これは部長をやってみて思うことなのですが、部という組織について考えたり、責任を感じたりする訓練になったと思います。二年で部長をやったのはとても心苦しいこともありました。今までの雰囲気を変えようとしても失敗したり、先輩の助言ばかり当てにしてやりのがしたことがあったりと、結局この一年なにもE.S.S.に対して役に立っていないのではないかと悩みもします。自分は、一人で何かを背負ってしまう癖もあるので、部員と相談すればいいことも自分だけで解決しようとして苦しんでいたこともありました。しかし、それらの経験は社会に出てからは必然と迫られることであるのだと思います。人をまとめる大変さと、協力し合う姿勢の必要性を学びました。

これから部長として第二期目を迎えようとしています。今春卒業する四年生には大変申し訳なく思いますが、この一年は良い意味で失敗だったと思います。課題は山積みで残ったままです。しかし、全体のためにも自分自身のためにも、今までの失敗はすべて九八年度で解消して、部員のみんなといっしょに楽しく部活動を運営していきたいと思っています。

まとまらない文でしたが、読んでいただいてどうもありがとうございました。

編集後記

本誌第四号は、平成九年度より全学委員会として発足した「麗澤教育委員会」がその任務を遂行することになりました。

今回の特集テーマは「私の出会った人・出来事」です。両学部の五名の先生が協力して執筆してくださいましたことに感謝します。人間同士の偶然の出会いや体験が人生に大きな意味をもつことはいうまでもないことですが、その体験に向き合う姿勢やどのような意味を付与するかが面白い点です。先生方の原稿の面白さに読者も満足してくださると思います。

そして今回も、コーチの先生や部活動を推進する学生諸君の熱い思いが十分に伝わってくる原稿を寄せていただきました。熱意と真摯な姿勢こそ麗澤精神であることを確認させられました。今後の学生諸君の活躍を期待感をもって見守ってゆきたいと思います。

「麗澤教育編集委員会」（平成九年度）
委員長　水野治太郎（外国語学部教授）
委　員　永井　四郎（国際経済学部教授）
委　員　森　　正晶（外国語学部助教授）
委　員　中野　千秋（国際経済学部助教授）
委　員　鈴木　康之（外国語学部講師）

編　集　『麗澤教育』編集委員会
発　行　麗　澤　大　学
〒二七七
千葉県柏市光ケ丘二ノ一ノ一
電話　〇四七一ー七三ー三七〇〇
印刷所　昌美印刷株式会社
東京都足立区綾瀬二ノ二六ノ七
電話　〇三ー三六九〇ー三一九六
一九九八年四月六日　発行